

日本歳時記

夏春



國朝佳節錄目錄

正月 賀正 屠蘇 射禮 七種茶種 門松 東土爆竹 赤豆粥 橘 正月餅
 正五九月名三長月為慎 二月 釋奠 三月 三日草餅 桃李酒 鬪
 四月 浴佛 五月 端午 粽 艾標葉 紙曹人 水菖蒲菖屋 菖蒲酒
 朱百州 浴艾菖蒲煎湯 黃梅雨 六月 冰餅 嘉祥 名越拔 七月
 七夕 盂蘭盆 燈籠 八月 八朔 十五夜翫月 九月 重陽
 十五夜翫月 十月 煖爐會 亥日餅 液雨 十月 上履被
 十一月 臘八粥 除夜 鰯頭拘葉 炒豆

附庚申說
 目錄畢

國朝佳節錄

後學 西峯松下見林編
 主 中村真術萬喜藏

日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世其人屢改浸精靡有差貸唯如授時

門曾
 775
 卷 276



民曆家之所未言也如夏小正月令
謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義
書亦庶乎爲授民教時之一助然其所
載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也
本邦自古未聞言歲時之明且詳者故
民間往往失其故實而錯傳妖妄之說
者居多識者憾焉竊謂教民授時在其
位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可
言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰
朽之餘齡豈艱考索嘗屬家姪好古令
編錄於事之覈實而便乎民用者書之
以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之
攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之
素志書稿屢換而輯錄已具於是乎
暇日逐條再修補之書遂成編矣第

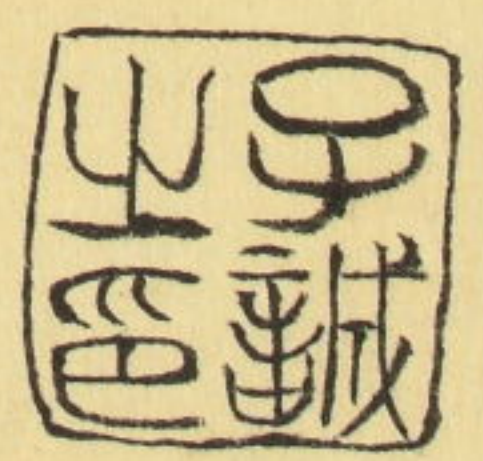
民曆家之所未言也如夏小正月令
謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義
書亦庶乎為授民教時之一助然其所
載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也
本邦自古未聞言歲時之明且詳者故
民間往往失其故實而錯傳妖妄之說
者居多識者憾焉竊謂教民授時在其
位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可
言豈為僭上乎不佞夙有志于此然衰
朽之餘齡豈艱考索嘗屬家姪好古命
編錄於事之覈實而便乎民用者書之
以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之
攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之
素志書稿屢換而輯錄已具於是乎
暇日逐條再修補之書遂成編矣第

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多其
誤亦不少後之學廣而聞多之君子
而正之則幸甚

貞享丁卯魁秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本書紀凡例

一 此編をあるむるのやうにあらう家よりこれをつくるを
是とす二百六句の房の底を本とすとのよ
おきるとはぬ 國の名字もやうに又家 國の本
といふと一ニケルよとて書はるるは
乞とす流しとす人こふをあらうす
後裔のこの一を民間の族の男婦の
本宜とす一めんたぬとすの
一 采封の底を屋とすまろの法を
此と知くまろゆはるるを
まひぬがくを世階れとす
一月く乃本宜を氏令日用しは
何れに

及此の如く後れどもいさかこれと云ふべきに
其の如くもいさか一考がすべしひひるす
本邦の民族もあれりあるは其の如く
いさか一考一考なり

一 東國のついでに其の如く其の如く其の如く
いひ侍えられども其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考

一 船運年中のゆれば其の如く其の如く其の如く
おる年根原年中のゆれば其の如く其の如く其の如く

本邦の如きまよひつれいあらん今これを考ふ
今又これを考ふまよひつれいあらん今これを考ふ
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考

一 此の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考
いさか一考一考一考一考一考一考一考一考

宗の疾の如く死を度く告げ醫を被りて死を後行
志とせざるのよせしめて執すところも是を去るべき
也と云ふ其の意はるなりとて養生の道ありきと云ふ
肝と云ふは夏に衰をえ

道生は後いしく夏に秋の時固林言を多敷の所を
して滞信と云ふは氣と育すべし久しく元氣して厨
字と云ふは又此酒と云ふは

令医を服せしむるは肝乃胆の腑なりと云ふは肝の腑小
入る小倉の肝と云ふはと云ふは魂と云ふは人なりと云ふ
るは

千金方いしく夏に千石土用千石と云ふは硫黄の物と云ふは
甘味と云ふは脾の味と云ふは

月令廣義いしく夏を温なりと云ふは性のある物と云ふは飲食
づゝいしく麦と云ふは温なりと云ふは温なりと云ふは
又此物と云ふはひ衣衣と云ふはと云ふは

本草を治すといふは春の月毎に取と云ふは二三石を
み水外すといふは湯に洗入膝乃下及之と云ふは
て此は凡毒脚と云ふは

本草を治すといふは春の月毎に取と云ふは二三石を
み水外すといふは湯に洗入膝乃下及之と云ふは
て此は凡毒脚と云ふは

月令廣義いしく夏に千石と云ふは
而多の心芽と云ふは

神武天皇紀卷第三 二月

神武天皇紀曰辛酉年 二月 正月庚辰朔天皇即位 立於橿原宮是城為天皇 元年尊正妃為皇后生皇 子神武井元日 命神武名川野 尊故古語稱之也 元日之朔日也 又此日之元日 於底磐之根 時持風於高天 之原而始馭天 下之天皇號曰 神日本磐余彦 大火出見天皇 後漢の元日 宣乎休之案の 舊事本紀第七 神武天皇本紀

元日之朔日也 又此日之元日 於底磐之根 時持風於高天 之原而始馭天 下之天皇號曰 神日本磐余彦 大火出見天皇 後漢の元日 宣乎休之案の 舊事本紀第七 神武天皇本紀

曰凡厥即位賀 正建都踐祚等 事並發此時 今按據我國記 本朝賀正之儀 始於神武天皇 元年如上所引 說夫以神武天 皇東征天下平 然後元日即位 然後萬世王道之 基故賀正之儀 於此起矣神武 天皇元年當周 惠王十七年先 漢四百六十有 餘年以此言之 則本朝賀正之 風不因漢而有 其後元日即位 然後萬世王道之 基故賀正之儀 於此起矣神武 天皇元年當周 惠王十七年先 漢四百六十有 餘年以此言之 則本朝賀正之 風不因漢而有

杜佑通典卷第 七十曰漢高帝 十月定秦遂為 歲首七年長樂

宮成制羣臣朝賀儀 書言故事亦引之其 下云武帝改夏正建 寅之朔則元日之慶 始自高祖

字彙曰元犬也又善 之長也又始也首也 人君立極改年不曰 一年而曰元年每歲 首月不曰一月而曰 正月正月一日曰元 日蓋欲人君體元以 居正也

屠正也

屠蘇博雅曰酒名元 日飲之除溫氣

本草綱目第二十五 卷造釀類屠蘇

酒陳延之小品 方云此華佗方 也元旦飲之辟 疫癘一切不正 之氣造法用赤 木千金方桂心 一作白木 七錢五分防風 一兩菝葜五錢 蜀椒桔梗大黃 五錢七分烏頭

二錢五分赤小豆 四枚以三角絳囊盛 之除夜懸井底元旦 取出置酒中煎數沸 舉家東向從少至長 次第飲之藥滓還投 井中歲飲此水一世 無病

時珍曰蘇魁鬼名此 藥屠割鬼來故名或

の初考の采ふは候 考と燒酒の元 事なり

和國の風俗を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

櫻子の行状を 櫻子の行状を 櫻子の行状を

云草庵名也
孫思邈千金方第二
十九碎温方中載屠
蕪酒
四時纂要曰屠蕪思
邈菴名屠絕鬼氣蕪
醒人魂

射禮北史卷九十四倭
國列傳曰每至正月一
日必射戲飲酒其餘節
略與華同

今按國風驍武安而不
忘危故正月王宮神社
行射禮古人有弓始之
儀雖小子男必射戲以
為佳事其所由來者尚
矣北史所筆豈虛也哉

七種菜羹事文類聚

第七曰人日採七種
菜作羹 歲時記

門松 世諺問答曰松
竹之青長而不變故
孟春立于門戶臣民
家立門松故藤原為
尹立春和歌曰今朝
者又都乃手布利
加倍氏千尋乃御注
連賤加門松
今按正月門前左右
各立松一株竹一竿
又上橫竹兩竿中挿
昆布果之類名曰門
松觀其所為蓋孟春
之月祀戶之義也禮
記月令集說曰戶者
人所出入司之有神
此神是陽氣在戶之

膠牙傷とてさるの刺を
時とてさるむらり月令
のむし軍屯記にさるむ
あり毎軍陣を同く一
酒と号し合家に之のめ
るつらさるる疾をさる
忌絶く人説と獲礎と
階礎類云にさるる李所
名竹葉をさるる忌絶と
後孫思邈の疾をさるる
白散とすさるるの疾を
さるる

さるるの疾をさるる
おと用ひの言を成法
家とこれにさるる忌
は海に度度とさるる
後漢の李膺杜密はさ
穽とありしをさるる
正旦後小起これとさ
不祥最後飲屠蕪と
東旦の節にさるる把
た飲にさるる把屠蕪
さるる盧柳をさるる
早幼さるるさるる

内春陽氣出故祀之
本朝俗間有晴明蓋
箕內傳蓋後人附托
之文也其書曰北天
竺吉祥天國王牛頭
天王迎婦於南海會
日暮過于廣達

國王巨且乞宿
巨且不聽去此
一里有貧人名
蘇民將來天王
至借宿蘇民將
來許之其後天
王牽后妃王子
等誅巨且賞賜
蘇民將來門松
者降伏巨且墓
驗木也今按此
說古証不足觀
之凡此書以往

氣の流りしを功の方と云ふ事人あるべし
其の流りしを功の方と云ふ事人あるべし
其の流りしを功の方と云ふ事人あるべし

○今羽衣の事
國像とありて紙よりたるを扱めて今の門
戸とたはやくと書き神事とゆふこと
如神の事
○とれ若水とありて
つぎくもるるのりままの日は水と飲を年中の神元公
深くとも人の事とまひてわさるるもけりを升水と

節故事悉為起
於於巨且者甚
非也又章見備
後國風土記有
似此事曰素盞
鳥尊通南海神
女時日暮借宿
于巨且將來不
許備其兄蘇民
將來許之素盞
鳥尊大喜欲報
之後為行疫神
人多死命蘇民
及子孫帶茅輪
攝曰蘇民將來
子孫乃免疫死
今小簡書曰蘇
民將來子孫也
正此意雖然巨
且蘇民之名非

てくみりりりとのびるもゆるりやまのそくを
若水とありて
○又菊園といひて
俗に庭と後の形は
張天女が類大をたてし七
内城敷蓋姫子我ふれと
但人を菊とて命するは
もろひも菊園ありひと
やみもむしりも古今
あふれやみのみと
そら子もせりも
このころを庭の
そくもろりも
又もろりも
又もろりも

和語也謹按國史
素夷爲尊行新羅
國據此言之疑
於新羅國有此
事歟然則巨且撫
民者夷狄之人也
蓋蓋監官管親風土
記誤爲天竺事添
以門松等說

東土爆竹本朝

正月十四日撤
門前松竹十五
日燒燒之以嘉
事小砲等向火
相唱曰東土爆
竹蓋我東方爆
竹也言漢家除夕
或元夕爲爆竹我
邦今夕爲之而已

事文類聚元日

條西方深山中
有人長尺餘犯
久則病寒熱名
曰山臊入以竹
著火中燂焮有
聲而山臊驚憚
神異經爆竹然
草起於庭燎歲
時記該聞集云
李暉鄰仲使若
家爲山魃所祟
擲石開戶政令
且夜於庭中爆
竹數十竿若除
夕然其祟遂止
至曉寂然安帖
爆竹或作三絃
打或作三皮杖
或作左義長皆

をまきくとれとあつてあひえといふかみ
とらぬあつたや

とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ
義とらると東財記よとせり

官長官星の朋友法きよひて年始の笑とのあつて庶
人そのその日むゆきよひて笑その友とらよとせり

とあつては月を都るかといふたぐひよひあひて
もくじつびとせりびとあつた月のあつてとせり

月とせりあつた月とせり
元日の朝は洋のきせり初とせり杖をさす
とせり初とせり初とせり杖をさす

初とせり杖をさす

○今日地に陽と梅ととる初とせり杖をさす
梅とせり杖をさす

とる初とせり杖をさす
元日梅は酒と梅とせり杖をさす

元日梅は酒と梅とせり杖をさす
元日梅は酒と梅とせり杖をさす

○とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ
とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ

とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ
とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ

とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ
とらつてもえりし際牙腸とくく本を膠固よ

開成中以燈迎太后
則是唐以前歲不常
設太宗時三元不禁
夜上元御乾元門中
元下元御東華門而
上元游觀獨盛春明
退朝錄今按上元出
舍利燃燈事日本無
之然恐入傳會故詳
記之

赤小豆粥 太平御覽
三十時序部玉燭寶
典曰正月十五日作
膏粥以祠門戶
事久類聚曰今州里
風俗望日祭門先以
楊柳插門隨楊柳枝
竹指仍以酒脯飲食
及豆粥插箸而祭之

荆楚歲時記
又三十六民業
部蠶家門曰吳
縣張成見一婦
人立宅東南角
謂成曰此地是
君蠶室我即地
神正月半日可
作白粥泛膏於
上以祭之當令
君家蠶業百倍
言訖而去成如
其言大得蠶績
齊諧記
今按中華用豆
粥或膏粥日本
用赤小豆粥似
碎蠶之義本州
細目曰赤小豆
粥利小便消水

先三つづつね 志くあるものり 後成因寺殿
跡をた境場出此釋を義之あを刑繩志を義
近以進を幸た志陽法取法明し成塔者志詢索
う不整おま其不施の芒塔也志質朴る不降之志
衣以法質を神明し法一條繩を具世之徒而法
連也ト款の伎よりぬととちてひびり
あしになふとの向う塔とあひるせまことひるを
天還をすあしと成義ありひびりあしより
を天たた法旋すうう海ありしう 抄すり
衆財記よ正月百晝雜とま今一貼一第索
とそのうふらうしうのゆれもろしうも
志あふはくろふしうのゆらうやみつねよ

炭とらうら半ハ草集後目よいしく白炭凍和立之
カ内亦辟邪也このまをるる
○今日子日よハ風と考て兼乃善也と法をる半は
ハ風とハ方より早ハ風あり風古より早ハ方早ハ物也
う来也ハ小早ハ風ハ云礼うかしく類なり気候
の転解は後あり純た一年の天運と行因の風と以て
知るその理ありこれ好ましく行徳とく候よあくもほふ
此ふ
○とらうらよま今日地符と改換り半あり地符と
地の亦もく札とらうらよまよ字とらうらてたは掲
うれと年の始とら換るある法把形地換る
と且荆公詩も此也了山海經よいしく海中小島

腫脚氣

圖凡正月自元
日至望前用獨
飾物以為瑞似
秦風

馮應京月令廣
義曰正月初二
日賜橋宮賜羣
橋臣

正月用餅 本朝
風俗正月用餅
名齒固為時物
食之猶中華七
日煎餅薰天十
五日王梁糕二
十日補天穿而
正月用餅
月令廣義曰煎

餅 唐六典膳部
有節日食料
謂正月七
日煎餅 薰天
述征記人日煎
餅謂之薰天食
于庭 王梁糕燭
寶典洛陽人家
上元制食
事文類聚曰江
東俗號正月二
十日為天穿以
紅縷繫煎餅餅
置屋上謂之補
天穿 拾遺記
正五九月各三
長月為臘 桃源
戴埴仲培父鼠
璞曰正五九三
長月今俗人食
三長月素按釋
氏智論天帝釋
以大寶鏡照四

望山あり山は地本あり地下に神ありく百鬼を
ふたふ今元日地符と設くとも人又風俗通もいふ
我らうふ所理とありありとあれどもこれ好まの致は
て候はるるもさうば候すりふか多し地を四方の本あり
み本の精と保ふる味辛氣悪なるよく和氣と厭はす
とありと氣とひくえんは地符とあるを邪氣とさふ
さるる一は因て地符とあるを作らばとさふ
神代ありひく作時流る黄水平坂あり地樹とさふ
その地の子とさふとさふとさふとさふとさふとさふ
軍治巡還ぬを地と用て鬼とあせく海はほし高年
平紀よりえはるるさふとさふとさふとさふとさふと
くくさふとさふとさふとさふとさふとさふとさふと
君希道泰真交國願年豐 下の句を抄るる詩ありあの句ありて
又書行林粒を地符いづく道迷前聖統朋誤遠方來
今み字をさふの地符ありんは修業思時敏進徳欲日
新うさふの類れはさふとさふとさふとさふとさふと
○今日字と始書す 曆はれとさふとさふとさふとさふと
用ひてさふとさふとさふとさふとさふとさふとさふと
微陽始布聲無不宜和神養素ふさふとさふとさふと
と化るとさふとさふとさふとさふとさふとさふとさふと
争とさふとさふとさふとさふとさふとさふとさふと
試梅試雪とさふとさふとさふとさふとさふとさふと
ゆふとさふとさふとさふとさふとさふとさふとさふと
次元日乃奇後拾遺小大者

次元日乃奇後拾遺小大者

大神州毎月一
 移察入善惡正
 五九月照南瞻
 部洲唐人於此
 三月不行死刑
 曰三長月節鎮
 國戒屠宰不上
 官是以天帝釋
 爲可欺也奇誕
 可笑然月令於
 春孟言無備胎
 卯毋聚大衆不
 可禱兵於神夏
 言君子齋戒必
 掩身毋躁薄滋
 味節嗜欲靜事
 毋刑於季秋言
 命衆百官無不
 務內以會天地
 之藏無有宣出

豈時令當然耶
 居家必用丙集
 云今人不用正
 五九月訪彼名
 流替諸故實皆
 無所據愚嘗論
 之正五九月斗
 建寅午戌屬火
 臣爲商尙尙金
 火能制金是以
 忌之擅經云正
 月上旬與九月
 下旬吉往賢本
 指以正月上旬
 火力猶微九月
 下旬火力已減
 故不曰凶或得
 吉日時辰此不
 足執惟金書避
 之緊

いれおくれたるありふるうらひおのり
 とふとふらや 是又百をよ大納をる
 いのりふふ年のとり ときれふしひち
 とのあきききききき 後拾遺集、名系を友
 あつむのうらとててくけふ
 むつるんれ ぶ系集、記費之
 ろうあきききききき 命系集、記費之
 こふのきききききき 命系集、記費之
 けくくくくくくくく 命系集、記費之
 はるる身よかり 命系集、記費之
 元結、命系集、記費之
 一日今年始一棗果半元凛涼百のまふつゆ
 二年同

日新其の元日の詩よ
 燔竹のち一棗深き風そ暖入居癩千門百戸曉
 紙把新地換着符
 宋若くう歳旦の詩
 居間信が客早起仕出常桃板
 車風回笑眩言氣ト豊穰柏酒何初人
 常、伊史と業、本定、は、知、あ、今、日
 〇世俗も今日終日屋中と掃除せよ新
 とらふひをそびくとおきすささる、お難但
 今切と角いそり六一日もく、毎、う、次

程、つ、く、一、下、

周の隆元日よりみまきと書之瓜原の葦に
即地より石と瓦海と書と作るといふ
人少氣と喚のこをりやとせり三つはとら
ももやうのゆりしとんてり

○とくたきよは坂と畑と電の地と張す
○今東まぬの文とよも六書命と張る
左廣義よみえり

立春を正月乃節なり大さの辰十日平柄長よ折とよ書
といふは始建也元日正月の日の始也よ書二月の氣の
始なり一年は天運をいふなりすはつたははとんて
んとぬめえの始とよくすづしもろしやをけり書
とすの將者粥と合しよ書解とくひ能湯よ後すり事
介とゆりし月今廣義をえりよ書よの方古今集よ
書く

神むら〜むらひ〜あのかえれらとよ書り
今あつせやと〜ん 回集よ二条乃辰
書のうらよまを記のりうをひよのこをり
あ〜い〜やと〜し 回集よ深乃まきす
谷をよこら氷のむら〜んうらちりゆやとら
ろ〜りれ 新古今集よ折及たぬた
み〜し〜ねと〜ん〜く〜白ちのあ〜り
ゆ〜し〜ま〜ま〜た〜ら 回集よ後成
き〜ふ〜と〜ん〜ら〜く〜ゆ〜と〜し〜書〜と〜都〜よ
〜し〜ひ〜け〜ら〜

曹松うまきの詩

玉嬌侍侍帝陽和意壯辰土半日東院深燕表
春暉老星回次寄月建宮梅兒將柳文倫思就
鄉人

黄玉梅うまきの詩

五十を閑紙自憐後果歲月久花犹余生未度
看新曆又彼是風滅二年

七言句行のうまきの詩

伴回東院冰老少春入人間第不知何覺眼平生
之海東風吹冰保差

○ままの何もういふ解集してあくるけをま
この黄をうまきの詩後まうて免でたし

黄玉乃あまひのふりいれりま山申りてうま
次いさふ手都みうぐいむ多うて園あるやと林あり
あまあまかしぐれもそのあう貴すう梅よつらまな
くしやあま杜鶴もま多うてあくるまがし地乳乃
かそれるあふれ

○年の始よまま子の破魔らううく村り治まらせよま
とまればるまらうべし但むうそ村礼して正月南裏
まくら村り半乃何ううう孝徳天皇これ御宇よ大
田やう正月よらうとまむむう事古きまも及んを
からうのと下まうけうううう事乃らうまう年
長せり人とうと射うううや又献通考日本乃部
毎正月一日必射戲すし記

○又練杖チツシヤクの事あり是書尤も眼とらうといふは
もどたぐ書名の惑ウツクシ玩ウツクシまどゆづき

取ク昭神中抄ウツクシ十云十管派ウツクシ英帝取書尤も練杖チツシヤク之
今練杖チツシヤク是也イハレ被例ウツクシ漢土年始ウツクシ用件ウツクシの國中ウツクシ也
事仍日本國字其例ウツクシ年始ウツクシ練杖チツシヤク云々事た

厚くは且たきふもえんべ附合の流多し

○又あられさ女のわらわのふたのこといひてイハレ樂華子ウツクシま
おとつきく板ウツクシをけはくすあり世流ウツクシ回答ウツクシよといひ
あられさとの蚊ウツクシよりぬきまぢひるあり終ウツクシちぬ
情ウツクシ障ウツクシといふまぢ来てぬととやうおぢウツクシふたのこといふ
樂華子ウツクシふんどといふとやうからありおとつウツクシけりて
板ウツクシをけつてあぢとばある付ウツクシんでこのやうあり

ゆ〜板とあうま〜ゆんあめこまのこ〜はさゆりあり
いんがりの板と合の
ひあぢとよまらう

○又子奇ウツクシ美ウツクシ兼ウツクシらう事一月ありむ〜冬一月十六日
日月のひもさバ踰ウツクシ款ウツクシとて辛ウツクシ才ウツクシの男ウツクシあうたといふと

内裏ウツクシとて祝詞ウツクシといふひてまウツクシせウツクシまウツクシつウツクシなり
中事一十月の
成の正月十六日
持流ウツクシ天ウツクシの古ウツクシ時ウツクシを漢ウツクシ人ウツクシ踰ウツクシ款ウツクシと奏ウツクシ世ウツクシ

こらや光ウツクシ原ウツクシ氏の相ウツクシ流ウツクシのウツクシうウツクシこのよウツクシんウツクシあウツクシれウツクシあウツクシりウツクシさウツクシゆウツクシかウツクシ乃
あうりの事ウツクシぞういウツクシ海ウツクシ風ウツクシたるうの事ウツクシよウツクシまウツクシつウツクシてウツクシあウツクシ奇
美ウツクシ兼ウツクシ乃ウツクシ祝ウツクシ詞ウツクシとていウツクシひウツクシゆウツクシありウツクシあウツクシ奇ウツクシのウツクシ舞ウツクシ人ウツクシ美ウツクシ兼ウツクシ春ウツクシ樂ウツクシ
と奏ウツクシせしウツクシなりウツクシ百ウツクシ兼ウツクシ樂ウツクシとてウツクシ兼ウツクシひウツクシありウツクシ
世流の言
かたじけなく
今も兼ウツクシ乃ウツクシとて美ウツクシのウツクシ舞ウツクシ人ウツクシ美ウツクシ兼ウツクシ春ウツクシ樂ウツクシとてウツクシ兼ウツクシひウツクシありウツクシ
と奏ウツクシてウツクシうウツクシみウツクシ採ウツクシありウツクシくウツクシありウツクシあウツクシうウツクシてウツクシいウツクシありウツクシもウツクシらウツクシり

二日 巳日と狗日とあつて東方朔の書より二月一日と籠う
二日と狗と三日と猪と四日と羊と五日と牛と六日と
七日と人と八日と穀とすその日晴る
時をさびる所のところのゆくふり付をさへつくとせんれども
天地乃造化自然の妙理ありからん言といひて天地の
大なるたと推するを素数といひて海とんふふはり球
よわくはまほくら本向くすや杜子知く法より元日と入日
未だ不陰時とくつ信後とくつて天竺の時四方授礼
て人地よりあせりあつるのむら
○今朝卯の刻より起会府よりうて雑煮とくひ冷酒とのむ
し此朝のどくくみ置飯とをく温酒とのむくくさの氣
まの度よりこのせり所とを今日明日はてかすく

○七日武家より馬宗初ありこれとある知りて唐よりあつてあ
みら初鉄砲初あり農家よりす初あり商家より
あつた初とく舟を船宗初とん
○世俗より去年新の妻より男よりは水とからるのありさ
水深の以河波の二好く妻長に水深の好くは夜女の好く
妻あてせしより水敷とあり初くくくくくくくくくくく
血氣の盛れりよりまきくくくくくくくくくくくくくく
ふの病とせしとくくくくくくくくくくくくくくくくく
酒合と客をを碎れくくくくくくくくくくくくくくくく
裁とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
言今初飲食とるよりみ昨日のくくくくくくくくくくく
雑煮とをくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

五日米地あり今を以ては領内の農人多く米地す必版墾
肉と与ふ一二年の初の谷も亦存ふ分はたかく其
と多ぶ一農は是を以て下れその後播の功より
刃と名一も亦多れは早敷くしとくはりそりよ
てくらんは米地とたより米以祝し是年の農
功よむくゆりさるり又道ぬよぬ人多くは平の穀
ありしを今も今

六日休治

七日人日しりふ送る又重辰ともさう人ひ百物の重めれは
かくいふや和俗よしりふを以ての初かり今日七種の
菜粥と製し今ふ七種菜といふは哥よ
せりちるか入取もこべり佛の性もれすとも

これら七さき五穀の初を以て又重辰ともさう人ひ百物の重めれは
かくいふや和俗よしりふを以ての初かり今日七種の
菜粥と製し今ふ七種菜といふは哥よ
せりちるか入取もこべり佛の性もれすとも
正月女子の日若菜七種ともり半字多天竺のゆり
よりとどまるし名もさく是年十一月七日は後院を
七種の若菜と依とも又えりり荆楚菜時記も四月七日
七種菜といひて製しこれとくふとく菜不可は五種
○又け日山又しをく四方とやめは陰陽の氣と神り
事とて煥爛と除くの淋ありと錦幄若菜をよと
季元々人日れりいしく命命の升り山山高月高月那那原原
○世法同言よいしく今日初かりけとく白馬とんま
の白馬と馬の姓のなとん天よ白馬けり地よ白馬あ

又天の用を就けり地の用を為りしとてふかみありん
よまよと東邦にむしてこころを定とせしめし又えゆる
白るとまよとこころを定とせしめし又えゆる
先とて白とてのまよとせしめし又えゆる
まよとまよとひくもや宵月七のまよとまよとまよと六年
中の卯年とまよとまよとまよとまよとまよとまよと
乃とまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

言通人日寄社二捨送語

人日也寄茶堂遠憐在人思故柳條子也不思見
梅花酒枝堪酌胸有在在在在在在在在在在在在在在在在
今年人日也思明年人日知何受一臥东山二十春
豈知書劍與風塵泥泥還春二十在在在在在在在在在在在

○又おれふしへの後二月六乃子の日即おれく小松公
引くゆりのありおれんがなり

子た日をば好く人又十字のりなりきなふ公のた
然しよ何とひきま 後

君とせと席へまいていひひひ初子乃松の末
成とふらよ けふ松をまね方よまよとまよとまよとまよと
樹のまよとまよのこころの夜りふ好くよ知てた海けるあじ
あすのまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
之とてゆれはまらこころのまよとまよとまよとまよとまよと

八日俗醫最初某作佛と浸徳とそめ今日その暇
とつらちて宴を設く又毎月八日某作佛のなめよ
候と今午のよのありこれ浮居氏の伝まよとまよとまよと

みえりしうたれたは世の旗とある本年ハいざとて例と云んば
團よて進せ武田の家は神銃楯^{カネヌシ}とて先礼うけりし
儀と神よ宗めさるる武士と神銃楯^{カネヌシ}乃列南と云め年初
令内介とてふをなすれりしありし也村家先礼のまもり
八幡を帝義家の旗
と神よいひかりしや又しはなまむ籠りし者けりしは
平家の赤旗と神銃楯とをなす今も此儀^{カネヌシ}
ありし先礼よりけりし年を宗と神銃楯^{カネヌシ}と
なりしれは赤の儀と云ふはせりしとありしとあり
次すし下も團信とて或士の風とありしは信よとてひは
元風信よとてひてなりしありしとありしなりし也
礼義よ宗ありしは風信よとてひてなりし

日本室時記卷之一終

日本歳時記卷之二

正月之下

十日門松河連繩と去今日見奉の歳よなる繩と教令つらひく
ありしひりありしとて繩^{カネ}と云ふはなりし也

持守りし室時記いしく立春日拖鉤^{ヒキ}之歳は彼地^{カネ}後鏡相
貫綿直教星鳴鼓^{カネ}去年之梅云輪子遊^{カネ}是為載舟之歳退別
約之進則強之也日鉤法^{カネ}進以鉤^{カネ}為歳記也これ後引
おひりし也なり

〇とて東麓^{カネ}葡萄やく白杵判令つらひの地也そは友つら
収養まきく人のもととておひれとていふとてその内り入
重とありし乃方より取てその折友の米懸^{カネ}り入てし
下よせせばねとていふとて地つらひをいふとて

てきよけりひの〜家々の國をいびく〜
四國のあひづ〜

○西國の〜日産を〜
けり〜苦業とつ〜
東國の〜
何せんせん〜

あす〜
と荆楚記〜
立子香葉掃〜
我が年〜
十五日今日と〜

と修〜
あり爆行乃〜
及道〜
つが〜

我國の今日爆行〜
〜
山腰〜
〜
〜
又二月〜
〜

その他に乳末を敷被爆杖を敷了又焦氏子孫よお
双漢安菜と月くしく爆竹妖氣と辟事伝た
鄰人よ仲唄ふつものありと鬼のあふ祟となされ
戸牖と用年半はるぐ山鬼きたりよ瓦石を投て坊と
多の奥巫現と求くこれといのうれば布て妖祟と
あふといふくはん多う取れぬ謂ていしく日水庭中
よあわく津水のごく爆竹す半粒半粒せよゆその
云とゆらうと爆竹をく咬よいりこれう妖祟の
事やうしくあんの敷込といくは道バ爆竹のたれは
辟りよのてはありまわぐ

○今ね小豆粥と煮く値とすてこれと食ははかの例
そり秋弟子よ十わらもらうものせくまふとわたりも

い半句り寛平考はより初りところや又七種の粥といふ
米粟黍子稗子苡子胡麻子小豆也と延長式よんを
又九條の右恵おの記を白穀まあつき粟粟柿さけ
あご多うとるせう二月は地炎粥防風粥紫蘇粥など
くく人よあうさくし半千今月今よえり

世風記よ正月十五日小豆粥と煮く天物奈とあひ庭中よ
粟とをそのうよ粥とそあその粥凝時東方よむくみ再
ねも跪して乞を娘とよバ夜言のうとていお後
毎詣礼劉致奴う夫死かどよまゆぐのえはとてこれ
妖言の改すて伝すふたす玉姫宝典よ正月十五日
膏粥とゆらうて門戸とあると言せう又荊楚菜
記よ正月十五日豆糜と伝くす油膏とそのうよら

つ戸とまらつてくはえさうり月令も書きよとんとれ
ふしつ子のゆきばきん後くはきんた

○今日祀え考妣乃盡前よ茶酒とそめ新果とすも
魚一毎月を日替ふくあつてかてりてきんた
程子卯書久とまればきんた

○枕蓆子いこく十日よあめの本むれがくそまのこい
り女中をのうとふとこれとまらうてはぬようし
ろとらつてふまてらるるにたふてきんたさうあ
らんらりてくまらひてけうありとらうらひたる
いこくこく又校夜守の巻よいうと羊とめ
ぬ十のうとまあさくこくまらこくまらぬ
をあら粥杖のくつてくまらひまらひまらひ

ういこくこくあつていこくあつていこくあつて
アもこく信巴下細粥乃杖も打古平可勤
林の中も粥杖も女房とらうて巴子と生れ
うのうと我前をこくまらひてくまらひてくまらひ
ごらうとくまら今日粥杖も松枝来るもく女中
ゆとうとこ子とくまらひてくまらひてくまらひ
は今こく小川の蔵本とまらうて田のくまらひ
りてくまらひとらうて女とらうてくまらひ
ねとまらひとらうてくまらひとらうてくまらひ
ゆとくまらひとらうてくまらひとらうてくまらひ
お出れらうとらうてくまらひとらうてくまらひ
んをあらまらべつて

○今更々二年十二夜の圓月の如あり成らん何ん
今と昔の月は改めず本も亦改めず是人の如く
あゝ昔の月は改めず本も亦改めず是人の如く
是今人博修其月也今人如悦といひ一車超は麟
候録録よんてさうあ我事よふぬ月既其信
花のいろよひつとらう一車超は麟
月を思ふくきり 新古今集よ大に女皇
てうとせむいさうしとて如きの水のおろろ
月夜よまゝくともろあま
○今夕更ぬの文公も本と忌に其命と換すと
月令廣義よかんてうり
十六日 圓俗世日遊樂と事とす

み新修よ新尊の人多く正月十二日といひ寺祝
よあそぶこれと走百病といふゆゑなり
あそび日遊樂と事とあり
○又今日も若かりし奴婢ハ宿居 遊樂と事とあり
日の始とてあそぶ 父母兄弟親戚の福す
持すくち新修の執令言ハ事乃若の如しと
禁ずるものと司り安なり 唯正月十二日更ぬとて
各一日禁みゆらるこれと改換といふゆゑ也
の如く改められ本もゆるく改めたり
廿日今日女の鏡老の祝とてうまは依りし鏡老と事
今更々これ其の儀乃能といふもひさし
廿日とてゆめを改めといふ初祝と詞祝と

少くもこれと傳ふことありて修ふべきありしを

晦日沐浴

○凡そ家人功なり此事を日々暮月宅中と云ひて掃
塗する年とありてこれ毎月晦りの家内を掃塗する
べく掃塗しぬれば本月中掃塗するもたすくて人切
るべきこれよくある也と云ふ毎月晦りの法日乃
は下として之布と掃塗しむるを悉く式をんを
○荆楚策時記云元日より月晦まで掃塗するを
悉く飲食人土女舟と云ふ或は氷よのぞんで宴樂に
毎月これ弦を鳴初りて二月を初年なりと云つて
俗にとんと多しと云ふ今之氏もも年終ふ
親戚宴會すると云ふ云々といふ縁ありれば月世人

初く親戚と宴會今予あつちの事常中策時記唐の長安の凡そ年

終りて掃塗しぬれば元日以後中を掃塗するひん俗に

國のそなたのころなるもや志と云ふも果初より男女すく親戚乃

家より中へ注ふと云ふ由れば月世に空を懸て

て約多し用ひと云ふの事これと云ひて後と云ひて

日と同し方と云ふ人毎月多し飲食なり酔飽をく宴會

と云ひて却て兩事とも云ふれば二月天氣和暖の以て

花開時よりよく親戚と宴會すく一は今の宴會と悦樂

をり所なり古人は附字今の法に二月花開時より

花の参り参る事負外の家花樹の歌よ

今年の花似去年好去年人好今年老始知人老不如

花可惜落花无空掃君家足亦不可高列御前中

尚書郎朝回花燈恒香客花撲玉紅春酒香

之れども親戚すくはき人成らば子孫を命のも親
たることも知らず其情よほすべし

付元日より西日のおきく世は小威徳神とく多かる本心也
唐林同言ふ凡陰陽乃るものと用る法よあふとより一は
凡る東法の方ハ一年の乃るもの法乃る方より皆十干乃法
あり位十干の内ふと陽法といふ甲丙戊庚壬これよりを
陰法といひ下己辛癸とより甲の東法を東宮甲乃
方に在丙の東法を南宮丙の方に在戊の威徳ハ中宮
戊の方あり庚の東法を西宮庚の方より壬の東法ハ
北宮壬の方よりけいふ干北東法は皆陽法といふなりそ方
にあり又乙の威徳を西宮庚の方より在丁の東法ハ北宮
壬の方より己の東法ハ東宮甲の方より辛の威徳ハ

南宮丙の方より癸の東法ハ中宮戊の方より乙丁
己辛癸を陰干とすなりあつて法命陽干と記
合して法とあすうとひく己と甲の妻とて合人
なり己の東法ハ甲に在辛と丙の妻とて合人なり
辛の東法ハ丙に在乙と庚の妻とて合人なり乙の
威徳ハ庚にあり癸と戊の妻とすなり癸の東法ハ戊に在
ふゆこれおれとあするなり木の妹といひ庚の令よ妻
せ火の妹といひ土の妻とすなり土の妹といひ甲の本よ妻と
令の妹と丙の火よ妻とす水の妹と戊乃土よ妻とすこれ
おれとあすうとひく各令とてひく美物と生れり
ふれは十干乃陰陽配合一多一年の乃る物と生する
ある方なり一神の名ありん陰陽配合の候あり

いんやを祀りてまつるを古礼なりと云ふべし
が禮記内傳より年法祀に海陽の地ありと云ふ
天子の妻を刺塞女のものと云ふ一云くもてふは
禮記の記ありて世俗に於ての邪説と云ふべし
禮記の記ありて世俗に於ての邪説と云ふべし
人々を誨はよと云ふべしと云ふべし

二月及三月九月も々々世俗に於て日月の祭
と云ふるありて礼記に月祀太宗伯の言に宋記に日月星辰
祭義に祭日於壇祭月於坎揚氏云春分朔日於夕月
世宗曰月之正也賈壇保博傳云云代之祀天子去胡曰
日秋暮夕月鄭氏云祭日於壇祭月於坎顏氏云朔日
朔夕月以養春皆迎其初出也朔日祭の事於禮記に
載る云々

天子の日月の祭一法に事といふなり 胡の八人合み
十二代漢書天官の注に天官之祀の古者よりして卜祝氏
の祀春の大明神よりして七代の祭に於ては社稷神
ありて王城の至也也云々祭に魚味と云ふ列火と云々
日約と云ふ一む竹射より日待月待の事と云ふなり
今の世俗に庶人よりして天子の祭に於ては日約月待と
まう者飲食と云ふなり日月の祭と云ふ一曰約月待と
号は天子にありて日月の祭と云ふなりと云ふ
祭のこれよりして天子の祭に於ては日約月待と
の古も天子の祭の祭に於ては日約月待と云ふなり
と云ふなり孔子よりして天子の祭に於ては日約月待と
と云ふなり孔子よりして天子の祭に於ては日約月待と

へんやとそれゆへにいふ事あり又倭姫命世記に神
 としけく神よりつらう道と法人より一あいに併法に
 思ふと云ふぞあて神明と再ねにほれりそこれ神
 的の法と佛法とを混ぶる所ありなむいふに伊勢神
 宮より月が二ありとも倭姫のともさうの事法とありぬ
 志のこありぬ延喜式伊勢神宮の事何れ佛と申すこ
 いひ神と法紙といひ信とありてさうのいふ寺と尾をたひ
 宿と發とといひ危と女發と云齊と行勝といふを
 因乃七とといふ又介の七をいひこれ神明のふくいは
 らひ法なるその名とていふありと念とてさうに初紙
 といふことありさうのいふことさうのいふこと今日約月約
 日神月神公まつらうをいひ信と法と信と法とよませるを
 云く神と信とけりなうあれぞさうさうのいふこととよ
 みさうさうぬそのつとぬくおまはる人らもあて祭
 せざらぬそのあやまらうのいふこと天地神のいふ
 ことと後よそのせめとをすといふことかた信の
 こととつとらぬことをいひさうのいふこと天地神の
 世の人々の記とありてこれまきとある信の事とあり
 といふこれいふこと妖巫鷹宿のともさうにわらうといふ
 事とありといふこと天地神のいふことと信とありて
 信といふことと世のあやまらうのいふことと祭とあり
 といふこととありといふこと

云く神と信とけりなうあれぞさうさうのいふこととよ
 みさうさうぬそのつとぬくおまはる人らもあて祭
 せざらぬそのあやまらうのいふこと天地神のいふ
 ことと後よそのせめとをすといふことかた信の
 こととつとらぬことをいひさうのいふこと天地神の
 世の人々の記とありてこれまきとある信の事とあり
 といふこれいふこと妖巫鷹宿のともさうにわらうといふ
 事とありといふこと天地神のいふことと信とありて
 信といふことと世のあやまらうのいふことと祭とあり
 といふこととありといふこと

つゆの國陽乾徳といはく尾庚申乃日之六人のこと
いせらび庚申と守ま六言なるひそび庚申とせ
ま六言休す又大年庚紀といはく勢を之麗の姓
考ま人の内の中をわくを飛とうふひ家し庚申の日
よままじよ上帝は許たふ記とまらぶよのまらぶ之麗
と終ぐかこのごとくあまはれとち神はひぐくた上威
意海りいとくそ何神とまらく今月の内の中をわくか
善徳とよく考まき庚申乃日といはく上三言の足のお
おん下の天曹の文よとて此人をくこのぶとたのあま
えゆひひらととり失ふはぐそのかあやまらたおれは天
より一紀三年の書あ命とくひひ小なまど一第上十
日の命とくむらなるもまをと神がふよのゆきしてこれ

とよけよとあつらるるを世に改むんぞ信するたらんや
積善のたまをなげき又けり積不善の家よハ解殃あり
平人のあまらぬ然の記ありまらるよ善とありては庚申
の求福やまらとてちりあまを飛とまぬらとてさ
人よ悪とせよとまらむらたれど不善とありて飛と
天よぬまはいのるよあまらたるとまらむらやいじんや
庚申とまらとる糸るの義あまらそのお神からんて
鶴明といはるといふ今世の信えとまらむは慎念とま
らむて庚申とまらと神すあまらうのよの何れまら
ぶく又言邦とく庚申ハ後田庚大神の足と
少少くかの大神とまらむとくふ人ひまらとこれ又
今の説けり又庚を命あり申し命あり命と命と

すの月をてつじびで日ありは原の中よ土と入ておを
祭とすうとつうは又鬻をばりふりのお刺といも
庚と申すのこやうだつてさゆたあさ事とてそん
ゆりたど流俗よまてうらぬね流俗あつてとちなびたて
可なりこれ柳子厚三戸と罵りあり是淵頼三郎はあ
り死京綸柳子厚と跋すうらう又宿史あり庚申の會を
乃其の邪法とて新氏をいへてとてをせう浮屠す
らその妖言あつてとてかくつらと群流採服よ子
厚う又と淵頼が信をうて信をも又い物つてすとよ
謀り笑よ信をう許部別を信る東定初共守庚申と
いふ口と一は籍う困居の信り一唯友批甲子不
行中庚申といふこと

世俗西九月とてい三月と拘志事とをさびり中身も
つものごとくあるとてさう又新徳よ西九月不と友唐よ
てい算け忘ありは波難志よいといは法以は三月る齊
素月不宣宰教足被信ん今京師官命下刑任初不
忌此三月る差殊文少介友と不廻く考る福取文多
何不也と甚也といり又柳那代碎海といく西九月
不と友戴柱といく教氏の多海よ天帝釋言後といて
冥天神別といくは毎月了むと柳てく人の長あると事す
此三月も勝部別といくは老人れといく死刑といふ事
曰三七月その法周く唐宰といふむ不と友後世因之と
多んことといくは浮屠氏乃てまう出て信家の役
何とされんを此以論すらよ及びは事今をいふは拘

よるづまひりて可なり

とろくしあま三月は淫鬼乃像と圖して鬼と厭（厭）二月令座
義にんえりて狐 國より淫鬼のつせよ久しくはるえよと
やゆんを後とつたよも糊するち何うは道ハ唐造史よ
る社の武造年中淫鬼とらよの神奉よ自せし
及第せざる事と取く改め給くたすう但れといし
せし祀節と給うて葬せよまぬ明を法よ成年の正
月元日の末のふまよひとりのお鬼ぶつろく虚耗と稱して
玉笛とぬすむ所よ一大鬼来て小鬼とてとんとてふ
明を愛のこちにささぐると何れハ封くやとて
終るふ乃をを淫鬼とらうし進死せし時祀節乃葬と
給るふ狐をめり世身ハ狐とせんがわん世とて天下を耗の

鬼と除くこり又給ひてまゝに女鬼をれらち号道す命ト
その像と圖してこれと天下ははるらうとてあふまその
たうりちるもや志れも源述此記謝賜淫鬼表あまは
用元よりあ改めは事何うとてく一揃するは次はあまは
そく淫鬼唐の明をのまうをうとていひはるらち此を
小史よ妻暄平の名ハ淫葵字を辟邪干勁字ハ淫葵
宋の宗慤の妹の名も又淫葵とて葵と怒と聲同しと
字あれりのこましく本音は自の時珍しく雨靴よ淫
鬼菌れ名せしけり又考工記の注ハ淫葵ハ推乃名るを
と見くこり菌推の形よ似たり推又菌の形よ似れをを
同す後よ神の二推と執く鬼とらうつ圖と事盡て亦淫
と名つく本ぬぬじよの周く淫鬼の信とんくこれ

笑のをまよく見と察ふていふ事なるのくありて此
詔とすら次

注ののる時珍之後といく四伝くすべし唐史の後の
これの事述あり何ぞも此すら傳人や著くすと伝
せばすら此よとらぐといく事いひたるうすく後今をいふ

又和胡といえと所とて意も傍心の後と出てつたふ
とすら邪病といふまじきまひなるうすく後今をいふ
すらまじ元亨新ちよ意も傍心の後とすらの民たふ
押の傍成河渡といく事といくすらと折ていづく家
祿像といふ下とまじきまひ邪魅実龍といふらん又
此の夜と病といく事といくすらと折ていづく家
このの事といふ事といく事といくすらと折ていづく家
あひ理の事といふ事といく事といくすらと折ていづく家

げ月樹木と綴載し一月と本とらゆり上府とすらと書まらんえ
たり枝と切く地と挿し廿月とすらと花菜と綴載るもい
月よりしと月令廣義よりいづくこれら後生乃氣ひ
ゆく能生活とらなるや老政令書よりいづく元法を本と
挿し下弦乃後上弦の事といく事といくすらと折ていづく家
て書ありと書といく事といくすらと折ていづく家
ね系よりいづく事といく事といくすらと折ていづく家
や方といく事といく事といくすらと折ていづく家
まうりと樹と繩といく事といくすらと折ていづく家
肥土と入木と流といく事といくすらと折ていづく家
肉土ひすら入く樹といく事といくすらと折ていづく家

くうりちるふと加ん地面より二寸たぐをよしとて
ふたぐ垂るるの裁てのちす月をいへぬ水と流下

此月柳の枝を切て地を挿へまよき者すく月令廣義の

見えりんば月枝を挿て可多木ハ松栢柏椈園栢

栢栢海江海棠山棠花石栢山杏薔薇芙蓉栢栢

竹ありて法書土日月の細末一あり等分は

てありひくくまよきくはせ守たるを地よきつらあり

て枝とる年のごとくよき別の枝とて大さなるえ

どあり先穴とてくしてゆくその元よききたる枝とて

守すくはちみけありとてく陰地より或はよお

るひとすべし日といひありやかのごとくすれば法せざる

すくあり枝よきく根せしち付後くありては

冬よ廣義せざる木ハ月栢栢の附挿てもよく好を果廣

本そ正月は挿て一尺くは実くふくはく生出し

玩者利用よきあり管子よ十年の行を樹と挿れ

バとありてくまよきくハ元茶木と挿て匠をよとあり

日く園中よ挿てその中穴と挿て一とえとあり

賞するをてししは天子の樂あり管子乃ち物之生え

最可観といひ物物観皆白の付佳無子以同と

しかり物物皆まをありとて観て土地生木の仁公

くありてあり

歐陽公の種花詩よ

淡涼紅白宜花間先後仍須次第栽我欲四時攜酒

去客一日不花用

楊疎奇く云く紀乃詩よ

三運初用是將卿。再用三運者。深明。疎計奄者。二
運。一運。花。并。つ。運。り

新白雲。裁仁。表。詩。り

白髮。根。根。道。道。年。及。子。重。老。夫。以。欲。培
植。不。同。因。元。結。子。時

日月を後生の初めくたよ木と云らるゆゑと名をの果とく

つゞるゆゑかこころさむし〜ことうひまればおひまを

ア。然。乃。子。と。こ。ろ。ひ。ひ。か。れ。は。半。月。令。よ。ん。え。り。る

子のいしく樹木の時伐身舎就以時教言孔子乃曰樹一

樹。一。就。不。其。時。也。也。これ。系。義。は。あ。り。木。と。こ。り

然と云らるゆゑと心くせきりる不にあとばされりも

と運天地乃不者多〜ことうなり

運生録よ〜孟喜の月天地空始百物化生ゆゑ因

空〜と云氣と泄するゆゑなり

月。徑。肉。と。〜。ハ。神。と。や。ぬ。藜。と。〜。ハ。骨。と。さ。ぶ。る。生。息

と〜ハ。面。の。透。風。と。氣。す。た。又。梨。と。〜。と。か。う。れ。又。櫻

花。不。対。の。物。と。さ。〜。と。邪。癆。の。氣。と。瘴。下。月。令。表。義。者。を。也

凡。一。年。二。七。十。二。候。あり。六。日。と。一。候。〜。一。候。と。一。氣。〜。六

候。と。一。月。〜。七。十。二。候。と。一。年。と。一。月。より。十。二。月。まで

毎月各二候と云るハ先正月乃上候す一東風解凍

守二聲虫始振氷之魚上氷右立春の三候なり

曰。形。不。重。牙。ハ。鳩。屠。小。骨。六。草。木。萌。初。ち。る。水。の。三。候

なり

凡二日一敷漏割乃敷正しく百割百割ハ漏水の内よまた
 第よきざ知る敷あり法陽の度長に走らざらては
 束の長短ひくくす正なる時を求みどく束
 正なる時を正しく一正二千四氣を束たごひよも
 短くしそより以下每氣を束乃長短とさるべし先
 立長ハ正四半之割み十束中六割十束合百割
 あり而水正四半六割中六束中四割十束あり
 凡二千分と一割正一 月令廣義よ見たり

日本書紀卷之二

日本書紀卷之二

二月

注と舊撰と云中と春分と云○二月の辰名仲春背月令傳と
 夾鐘と云○二月の辰名と夜之志といふは月解をみけり
 ぬと云ふはまきぬきはたといふと
 ぬせりと奥條抄をみたり

朔日 中和節といふ

二日 今日と云初といふは法陽記よ見えたり

二月

釋奠 二月上丁

○孟子の生誕日なり

山堂肆考よいづく周の定王三十七年四月二日
 孟子生誕と云ふまはれり今の二月二日なり

八月上丁祭孔子
 子顔淵等御影也古者京師大學寮諸國學校
 皆行之見延喜
 式祭孔子有祝
 文祭顔淵等有
 小祝文見朝野
 羣載藤原兼良
 公曰明日以秋
 奠深盛賜羣臣

○國信奴婢と来るよ今日より元年二月二日までと云て朔こ
 以京教を二月六日より九月十日より元年と云て初こ
 伝又質はの奴婢射とやうて年教と云く居れ奴婢と来
 るよ禄乃かあるよと云と推しす又才福と云とあるは
 よ好びく質実たりと云ありと云と知くまはれり
 たく質実なるよと云と推し

懼仙といく買奴僕心
 粗悉者かす誅察者

并すけり

等稱曰聰明言、
食之令人聰明、
也。耀天記曰吉
備公在唐寫得
孔子顏淵等御
影會遺顏淵御
影而歸朝一日
其御影昇空飛
來國人大神之
世衰道微八日
諸國學校
荒廢不修保延
元年七月藤原
敦光勸文舉天
下衰弊所由來
日依學校廢也
觀此則其
廢人矣
大學寮
亦顛倒然金固
所圖之御影不
也。八月夕夕
○佛家も今日程か入滅の日とて涅槃會と云ふこと
とて二月建と考ゆやまけり。抄云く、
五十二年二月十日佛涅槃すと記せり。月の二月は今の
十月あり。まは今十月十日とて佛涅槃とす。一
十日孔子の生れ日あり。孔子の生るる日法法よりして、
二十一日は艾系と田即と稱し、或ハ市ふと云ふ。己の
茶屋とす。あり。茶地は人を農夫も持せり。

昨日沐浴

不可無也
於此行釋
奠報師恩不可
不行之李世學
校之政不復教
化凌夷人惟見
利而不聞義不
使令らふれひくもの多きくハ好曲あり。あり。の古
誘小上等の了り下等の人とつふこと。いふこと。又
己の質奴と使はるる下賤の人の年久くは。いふこと。
り。す。て。ん。か。り。た。て。あ。ま。ら。ま。な。も。の。あり。約
わと一年と定めり。その人不好をき。年もは。一
八日釈迦の生れ日あり。佛祖統記は月の昭王二十二年八月
八日釈迦の生れ日あり。但月を子の月とて。正月と云れ。今
乃二月と云ふ。了。浮屠氏の本と考ゆ。て。夏。の。四。月。は
ち。の。り。の。ま。り。と。古。の。説。も。ん。え。り。
十五日提摩羅今日と云れ。と。其。の。中。ま。て。百。九。十。九
并くは。あり。ま。は。い。は。在。り。の。あり。八月十日。釈。の。あり。
○佛家も今日程か入滅の日とて涅槃會と云ふこと
とて二月建と考ゆやまけり。抄云く、
五十二年二月十日佛涅槃すと記せり。月の二月は今の
十月あり。まは今十月十日とて佛涅槃とす。一
十日孔子の生れ日あり。孔子の生るる日法法よりして、
二十一日は艾系と田即と稱し、或ハ市ふと云ふ。己の
茶屋とす。あり。茶地は人を農夫も持せり。

和釋奥、各者衆
矣哀哉

従承より日は長し冬より陽來後して漸湯氣化

日もながくありて去らよいつる日長ひくくはる

去分の日考此先祖と考ふべし凡人家あるを考此先祖
の種とするべし考此に死せる父母とし先祖は祖父母
以上とし朱子のいひくすいはく考此とまづる迄は
祖より以下と考ふ程子は祖より以下と考ふべし
考ふ諫をばくすは孝とすはくゆみの義あり父母先祖を
此方の根不あり是るを考此に祭礼の時にしてこれを
之方を考ふことと迄のん也祭日二年の春に仲月と
考ふ四時のを考ふ仲月と考ふべし去分夏は祭日考
あり去秋二は考ふべし可考ふ日祭日考ふ一年は
是れ和俗をばくすは祭日の月忘れられぬ日本

去分中は考ふべし考ふべし考ふべし素合は考ふ

可考ふ春秋の祭と考ふ日のを考ふは考ふべし

生食と考ふべし考ふべし考ふべし日本は考ふ

り考ふは考ふべし考ふべし考ふべし

此方の目別は考ふべし考ふべし考ふべし

肉食と考ふべし考ふべし考ふべし

へは考ふべし考ふべし考ふべし

文を考ふと考ふべし考ふべし考ふべし

古法は考ふべし考ふべし考ふべし

は考ふべし考ふべし考ふべし

寮より孔子と考ふは考ふべし二月は考ふべし

以り日徳國忌初年の考ふは考ふべし

他太子寮より孔子が六十哲とある法因より先聖文
王先師教子とあるを宰相府より先聖先師太子寮と
つじしる延喜式より凡そこの事々武天皇と大元
年二月より一められし人後リキ紀後元元院寛
正年中まで於神皇の終りし一息にの大祀の後け
後終りしやいしある事々をえくゆ凡そ人々
上人より下弟民より多々く天下万世の仰るまは
不期しと多し終りし事々也執奠乃礼式延喜式
に於て等々詳なり

春分秋分の初日より二月ある日と始りてその後七日と凡そ
名づちし彼岸より又彼岸なる事々中日と名づちし又
時ふりし多しは七日ある世俗寺より佛の供へ信よ
観す又法法師等法僧法流と名づちしと彼岸舎と云

埃塵抄より空乘舟等しりて此は彼岸なる均等なる
此岸と云り日出は乃彼岸彼岸と彼岸といひしは故彼
岸ともかくしりしは法のともくむまも空初のみしり
事と云り志まはあれちしけりや故りて法僧法流と云
又此よりしり院より法りしりしりしりしりし林に公聖
祖よりしり本信家乃流しり樹菩薩の元と云り於平天
の例より重なる老ありしりしり樹りし二月より凡そ七日七
月より一歳秋八月七日果来摩磑前庭梵天帝釋等者集
りしり七日ある世間の善人悪人の名と云り記す生死彼岸
涅槃彼岸在りしり取しり修善業しりしり云林七日あり
この本乃しりしり也や砥平石の銘より彼岸は日本の風
俗ありしり云しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

國の浮屠氏のあがる本ゆく申舞天^{てん}のあがる本ゆく
好古これとさきう波岸の事と書なる天心^{てん}歎^{たん}記^きといふ事
一考^く何^んこれ天字の神樹^{じんじゆ}菩薩^{ぼさつ}の化^けとて仏家^{ぶつが}よれやいふれ
し佛^{ぶつ}方^{かた}多^たく^く國^{くに}の俗^{しよく}の化^けとてあ^あく^くい^いか^かう^うし^しる^る事^{こと}
みんず^{みんず}佛^{ぶつ}方^{かた}多^たく^くい^いか^かう^うし^しる^る事^{こと}とて
老^{らう}証^{しやう}の本^{ほん}の^のこと^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
不^ふ書^{しよ}ま^まか^かた^たの^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
り^りい^いし^しる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
万^{ばん}物^{ぶつ}と^とま^まひ^ひみ^み穀^{こく}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
い^いの^の秋^{あき}の^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
の^の成^{せい}の^の日^ひと^とま^ま社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
ありあふま^ま林^{りん}し^しは^は 社^{しゃ}記^きも^も仲^{ちゆう}春^{しゆん}持^ぢ元^{げん}日^{にち}命^{めい}氏^し社^{しゃ}と^と何^{なん}と^とい^いふ^ふ事^{こと}
成^{せい}の^の日^ひと^とま^ま社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}

風俗^{ふうぶく}通^{とほ}ふ^ふい^いし^しる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
こ^ころ^ろ足^{あし}跡^{あと}の^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
祀^{まつり}て^てい^いし^しる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
そ^その^の子^こと^とま^ま社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
棄^す継^{けい}て^てい^いし^しる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
の^の子^こと^とま^ま社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
茶^{ちや}邑^いの^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
乃^の長^{なが}あり^りぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
穀^{こく}神^{かみ}多^たく^く土^{つち}穀^{こく}乃^の社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
こ^ころ^ろ社^{しゃ}の^の日^ひと^とま^ま社^{しゃ}と^と生^{せい}れ^れぬ^ぬ事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
ん^んを^をり^り張^{ちやう}演^{えん}の^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}
又^{また}い^い日^ひの^の事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}と^とら^らる^る事^{こと}

よひくらしき燕を去せし時より秋の節今一月令

養より

夏分ハ陽氣の起る如く改る時して定位の内なる故に
去分乃命入し後如く法葉の根と下次し葉の
たぬとゆふまふと初とするものと恐しくいひやうて
彼岸病は保とすくとして思及せむより人士君子は
人のいつるまいたらとて去分を法陽の日のひくして
一年の大節なる事とすくくや又花葉の苗とすくは
へしおよりし時を収とせば根とすくもなれとの餅凡
菜凡茄 蓮 蘆 冬 凡 絲 凡 胡 凡 羊 牛 葱 腰 煨 草 地 膚
菘 蓮 藜 苜 蒿 椒 木 綿 地 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺 苺
牽牛子 雞 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠 冠
菜の根とすくちゆりやまき三月より但牡丹の葉をまきゆ

みちりつみい月樹木とすくし植し松柏の心よりい
月を樹とすくちゆりの中の時より古書よえはつ又樹木と接べ
梨と接とすくまふのち十日と用ひ柿と接よまふの後
十日と用し月令廣義よき存し又いし二月の苗ふ
とき葉の木の枝と挿生す又二月上旬は法の果木等乃
枝と葉を産葡萄と茶にすて地は埋めバ生ん子とゆり
まふよりいし月法果木と培

い月法葉の根と挿くむじし沈中へ種落し古法
草葉と挿くまふ二月分と用ひこれ叶の苗は但
二月の草已よ芽し八月を苗いし植ば成るよす
初よりいし葉をすていしよ良時とす大率根と用

物を宿根ありし者系ふに時より津澤に其の根は
てはまばなりこれと試んて知りて蓋根地質等と云く
苗の根にこれに実して沈むる苗あり付とて虚しく浮な
るその宿根ありし者すれはち苗ありし者より時
よりすれはち根生るる己より定てまじき者す今案
弟の苗を土に挿する時これに土から根を解し津に
時を根を隠し知りてこれを知りて系と用る物に系切
長足する時芽と用る物に芽の根に系と用る物に
花初く挿る時最実と用るとの實と成すと云取れ
限る時月と云す人々土氣を統あり天時徳信あり平地
三月は花を挿るとの深山の中を走らるる四月はむく
〜白樂乙北大井古詩よしく人百日月芽花を云
寺枕花始葉之用。これを記す

此月日と様々を治す〜每病あり今二月三月八月十月は灸
を湯育となすけ卵卵とあせぐ〜三月三皇経骨小七
仕灸して毒氣を洩せし夏より秋に脚氣病の夜句り
其考に叢書よりなり法の方書より鬼神人神などして
年月日付り治て禁灸の日何れを素問經絡等より古昔
明醫乃いしざるゆ〜後世術者の説は六經は以て是す
た曰季の名を去るたの綿より交の綿あり秋は右の
根ありしをハ胸にあ〜〜素問のそよれりは
〜鍼灸取英に記せり又日月毎日取と様々〜二百冊
指すれは毒氣と申高初く灸と云取は付切まぬの事
と忌と月令廣義より見たり

天子和暖の御外山即ち此親して血氣と伸暢す
朱子乃詩傳よしく周禮に仲春令會男中
行此媒氏の記に陰陽交以成婚禮順天時也
月を男女嫁娶の礼と約く宜しき月なり

月を合ふ大に蓋ありし千金方に冬をう
神と傷り難子とくくふんをう苦茗菜及凍菹とくくハ
痼疾と毒ハ梨子と食りなれ大蒜と合て人として
氣をさぐくくく小蒜とくく人の志性とやめり養生と
食りてとくく陰地の風氣と飲とふ是瘧瘴と致す

二月の六候第一地始芽也二倉庚鳴也三雉始鳴也
鶯乃三候なり也四玄鳥至也五雷乃發也六始

電也七春分の三候なり
鶯の聲ハ晝日十七刻五分來り申二刻十分春分至り申
刻來り申一 月令廣義

三月 三日 本用上巳

事文類聚曰巳
者社也
邪疾巳
去所介
社也 應
助風俗通魏巳
後但用三月不
復用巳也 沈約
宋書
晉書東晉傳云
武帝開尚書郎
甄虞曰三日曲

三月

節と清明と玄中と穀雨と玄〇三月の和名と生しく奥俗抄にいしく風俗
何くかやうて草木のあかきおのよ
いとおの月くりつととせうころ

二日 沐浴 艾懸と禁す

三日 今日と重三と玄又上巳ともいふ六初とくく也

三月 節と清明と玄中と穀雨と玄〇三月の和名と生しく奥俗抄にいしく風俗
何くかやうて草木のあかきおのよ
いとおの月くりつととせうころ
今日艾懸と合し地を酒と乃く艾懸と親戚とくく

日夜餼數用
婦人年紀數
文德實錄曰
田野有草俗
名母子草三
月始生葉葉
白脆每屬三
月三日婦人
採之蒸持以
爲饌傳爲歲
事嘉祥三年
民間訛言云
今茲三日不
可造饌以無
母子也識者
聞而惡之至
于三月仁明
天皇景駕四
月亦有擅林
皇后山陵之

事其無母子
遂如訛言今
年此草非不
繁生民之訛言天
假其口觀此則自
古用母子草今用
艾者非也又三日
兒女制紙人爲饌
者贖物之義乃故
具也紙人名雜亦
名母子蓋以此物
撫母子身於水邊
解除之見其所以
爲之恐依乎郭虞
故事矣今雖不修
禳事爲人形之戲
飲挑華酒者多苦意
也
本草陳藏器曰荆
楚歲時記云三月

○とらうくまの俗節も考妣先世の祀を以て亦時食とす
ひる後あり世間乃人少なりすはる事かたう俗節
元日の外上巳端午星夕中元重陽を以て類なりこれ世
俗の貴する所にしてその名物時食もさく貴賤
尊卑は悉く考妣先世を以てあざむくことらうくま
又堂花も亦さるるけしき事さうくまに七に事さるるあま
事さうくまにさるるのまをらんやま物もさるる時果蔬等
の類也時食も上巳の草履端午の粽中元の蓮系
飯重湯の菊酒梨子飯の類なり乞と登りてて堂
前にゆりて一宵初は煎煮とさるる後れ
○すくま今日曲水の宴もなれ乞ハ川の上も遠達一被
襪さく流水も觴さうくまの杯のまをさるるさるる

詩と此のさくまの杯と酒とさくま飲多事なり
相觴と飛するさくまさるるさるる
續春潜記いさくま晋の武帝尚書掾虞夏も同じく
三日の曲水を義何と指や執虞夏も同じく流れ
章帝の時平京に徐肇三月初とさくま今乃女と生
さくまさるるさくまもさるる一村の人さくま怪し
てこれとさくまは携けく盥洗し遂に流水も盥洗
さくまてこれとさくまのむめわれ宴もさるる帝のいさく
は流のさくまさるる儀本には何らす尚書郎東督さく
まとさくまいさくま執虞夏もさるるこれとさくまさるる
周とさくま色とさくま海に同じく危さくまさるる
さくまいさくま羽觴流波又秦の昭王三月上巳登河

三日取鼠麴汁密和為粉謂之龍舌料以壓時氣料音板米餅也時珍曰北人呼為葷母故邵桂子癸天語云北方寒食米葷母草和粉食宋徽宗詩葷母初生認禁烟者是也

桃花酒 文獻通考第百四十八樂考曰日本三月三日有桃花曲水宴一達生錄曰三月初三採桃花浸酒飲除病益顏

燭寶典曰寒食此節城市尤多鬪雞之戲左傳有季郈鬪雞其來遠矣今按清明前二日名寒食多在三月前後亦朝每年三月三日禁庭有鬪雞寒食鬪雞之意也中御門宣胤記曰鬪雞事幻主儀也近代長君之時有此事

此令人以て水面より出水の劔を揮くといふ今名刺有焉及秦乃朝結侯因此立為曲水並漢後漢のよみおほくしれ聖本との帝乃いづく吾令吾平介と東哲の物ハ聖虞と及遷志く湯城乃令とせりと久んをれも東哲う言も又時の附會り多行はるふ多し又風流も後漢の郭虞と事とあげゆりしうも後漢書禮儀志の月上包友氏登樓飲于北流水上といはば漢の何ぞとあるりけり郭虞と娘とすうあうれとに鄭のふの倍三月十日蘭とありと宋て不詳と被除するり得徑の鄭風よえそるまよ折りの後漢書の海流りれれその娘とれゆりしりの書類士櫻飲序撰述後也鄭風有之蓋取於句萌友也陽氣敷物振芳蘭臨清川衆和獨潔用徽介社立義我流矣反文粹晉令三月宣亭序云酒食出華野曰樓飲古俗也

我初うく曲水の宴とりりるるれ京天宮の御宇う娘れうさうの宴とて我國の曲水乃宮のゆりりるりるう人も少しえたりと後漢會通日本三月言有祀於曲水宴とあり新漢左介よ定家々めあり亭の哥り

久々うりふきやをよひのくく水もよみれ多うたれさうつ妻又さるあ今よえとあ

おれひよのあも瓜はあうりうつよのあもん志たうあふしはるる

○又今自難合さるるのあり世後因言いづくともうの半も明きくや御門たもるよと難と鬪とあはひのたもりく位うつさゆりうり貴む人ともうひ治給は

くれてこゝろあつたはれ甚ありとたのむきよ
多身くくん玉繁葉に二月老れんと大信のり
春もすしうたしりしてあつたはれはれしりや
こぼつてくんとあつたはれはれはれはれはれ
先づゆくゆくはれはれはれはれはれはれはれ
あつたはれはれはれはれはれはれはれはれ

賈島二月晦日贈劉評事詩

三月正尚二十日風光別我若吟為在吾今亦不須睡
味如味結行是春

清明三月より二日前の日に定食といひ日ありて小父每先社
の墓所と掃塗して祭とならぬのゆゑやこれいふ人
乃風俗なりと云はれ子孫高きといふ定食と十月朔旦展

墓名可為本初生初死と云はれ志願する人ハ一日祀
之の墓所よりてお掃すといふ事なりと云

け月祝戚及交友と食すといふ定食と定食するの力ありて
厚く下り豊約りの可きありて一人の立上り定食を
毛致して祭事と云はれ又為齋行して禱
先づゆくゆくはれはれはれはれはれはれはれはれ
及たしり世俗祝戚男女と答すといふ齋者と云はれ
樂と云はれしりはれはれはれはれはれはれはれはれ
て後集よりんといふ平安斎儀後集よりん可なりと云
二月天皇より日也といふ宅宅といふはれはれはれはれ
造りて或は本宅と改改及宅といふ是なりと云はれ
屋室といふ結核なりといふ家曆より記せり

い月菜蔬は茶葉茶葉と種下一或は葡萄二月初二
中旬よりえりてしるやれはけししる西元九蜀黍
玉蜀黍葱蒜烏芋豇豆豆豉豆豉豆豉豆豉
刀豆胡麻薑眉豆赤石竹地茨草麻子荊芥香薷
瓜豆月の席のふめうをては紅豆を三月の中を初
終と下一月のそまをやりしうゆはそこの室の
既氣湿りふをまううゆ一凡菜蔬とうりふを
はよりりしるやれはけししる空のりぬる湯氣を
めりゆめりしるやれはけししるまのりぬる湯氣を
みい月本と種下一枳椇枳椇香櫨の類を清明の後は
種よりしる月令度養ふんえしり
ころと蔵とえりて灰とくまぜ日よかきいめてかき

灰と度までみい月本一收魚一今年り耐湯のみ海にやち
用も式より考て用の色を新書のはる或は淹りて
煮し恒産乾産まふれりいんこれ恒産用入り于
炭は色くまを成み用のしり又蔵も狗脊も恒産し
凡花のちるまを其のほすをりて期するし一昔も其の素
アとゆきし今其の部のひとから種をまき其のほす日か
以て産のりてまの山申れは其のほす半育をひく
花候と今年のを候より山山下にるをすし一其の
阿道にもやうたがら茶は京都の半病ひと種十日
あまうおそし奥出くちお上平代より花候をなむとま
半一旬二旬二月也に和名の種は中よりやちまき種
ち種のはるに和名のちるをちるはしり

背小蒜及雞子と食ふは又會飲のふ腕と云ふ事なれど
 雍瘡麻肉と食ふは少時瘧と云ふは瘧毒瘧病と云
 以煎と云ふは神と云ふは八月に瘧疾あり孫と云ふはくせと教ふ
 かくして天をよびてと云ふ書命と云ふは百薬の心薬
 菜と食ふの心薬は至驚と食くはせざれば宿疾と云ふ
 三月乃上候中一相始并中二田鼠化為鴛中三虹始見右
 清明の三候あり中四洋始生中五鳴鳩拂其羽中六
 戴勝降中七桑柘敷中八乃三候なり
 清明の三十二刻十分夜四十七刻五分穀ぬを食ふ
 十日刻十分夜四十分刻五十分月令廣義

日本菜時記卷之三畢

日本菜時記卷之四

夏

洋書傳習志といく夏假あり假大あり并相假はふとい
 ることあり亦雅なまて朱明と云○和語小夏と云ふと訓せし
 あつといふことありふとあつ
 ありて異母の義と云ふ

素問といく夏三月これと蕃秀といふ天地の氣交なり其物
 蕃茂す夜より少く起す厥於日志といて其日
 りあつといく夏英華といく其秀と成るの天氣とい
 て泄すといとぬせしむ畢く出く畢く連く去る
 継言と指しなれ其意なるをいへて其長の道なり
 これも洋書傳習志といく傷暑と云ふ者なり
 千金方といく凡夏のる面といくくして外よりあり
 人といくして面皮あつて癢を生くは面風と云ふなり
 又曰夏七十二日若く味の食物と云ふは辛と云ふて肺

宋と書く

肉體にいしく夏月冷石鉄物なると枕し涼と云ふ
あるも天よ人の目と扱す

老生を強よいしく夏の言を撰りある菽と食ふこれ
と寒し撰よつなり

今医家略よいしく夏月冷石鉄物の食ふと云ふは元氣我
を盡せと化せん宜く若費と食して以てこれを盡せし

月令廣義よいしく夏至より九月はつるましく一切酒宿物
及水とのむりと思ふ又あしく鹽澁まかす

又いしく夏月腎氣衰絶をなす房色をなす元氣を傷
す事と扱は道戒之

らぬ拂子と生る

素書書よいしく盛夏熱と御衣冷水と云ふと洗
ばよ腕と乾拭せむいしや沐浴するや切は拭

又いしく夏の暑時を涼の上と云ふは暑すれ瘧と
生し冷を避て病と生す

又白夏月心胆腎喜を轉化して水とあり秋ふりく
刺癢を保養して法氣を固まると云ふ撰物と云ふは

中温暖あり生れ果茹氷水冷薄粉粥蜂蜜を食ふは
色と食ふは多くは秋時を必瘧痢と云ふは冷水と云ふ

体後し手面と洗ふ背よ舟く半ぬれんとて若無暇
暗く筋脈厥逆し瘧疾筋筋法若乃疾と扱むむ

の南く即りしは多眠中ふん臥去く扇と揮しむ事
是汗跡毛孔開展去く風邪入る一えと化せん人
風痺不仁言語蹇澀の疾と患し半年快すて昂害公
をんくすも亦病根と種あり氣衰たる人を標鼓の害
も衰むるが正し磁中ありしこれ証也

孫六人といく夏月内は伏法有り冷水とあり肌地生冷の相宜
くかく食しひのそくすれは秋を瘧痢とが事とせぬる
夏月暑の傷きましく才辨れりく瘦る人何れ後これ
夏瘦といふを病証よりく茶と服すし二万茶葉
十二を大伴家持の瘦人哥よ
石麻呂爾五物申夏瘦尔吉跡云物曾成奈伎
取食瘦鎌魚乃夏瘦と治す本夏月

四月

立夏ハ四月乃希小滿を四月の中ハ四月ハ夏ハ五月夏余月乾月
健ハ仲夏といふハ四月の初を仲夏といふハ四月の初ハ五月の初ハ六月の初ハ七月の初ハ八月の初ハ九月の初ハ十月の初ハ十一月の初ハ十二月の初ハ

浴佛書言故事
曰佛生於四月八日是日浴佛高僧傳

朔日因俗今日より六月四日まで袷と表ゆへ七日と夜ハ
くす古ありあむくよあり

四月八日浴佛以五香水灌頂

八日浴佛日あり灌佛といふ言俗俗は是日浴仏はく小梁
香といひくま水水く爵金香といひてあまきあり
丘降香といひあ白文水く海子香といひて若急水く
安息香といひく黒急水く佛頂の灌くといひり月建の
誤たるのみ既よありきるぬ本初を今日佛小水と浴
せしむるの推古天皇との御事すしりしまるるん

十五日浮屠の造夏今日よりしりて七月廿六日ハ
終焉と解なく云はる九十日安振きておまはる事本史

ホとあつらん事とあつらん事なりし秋苑宗規の記をえり

昨日沐浴

今日物も先くちくばの編ざりやうの縁の海下と田家曆
あかえりけりまをを梅のまなく一月を梅のまは月がわ
らぬく早のほえぬさひ日と云々天宮より日七時時光
を宅と御記して功多しこれ六唐六典と定役之功を遠
北御記かくすふ時何事とのをより一月より七月の事を
七切と云々一月八月九月を中切と云々十月より二月の事
もくと経切とすと作りまを六は月皆水の時小使させ功
多ししてなすものさしりて又は月定梅のまなくあゆみ
あり後よれと卯の花藤とくふ卯の毛際と云々
け月天氣よれ時書盡書と日に晒してたぬの糸ふて紙よ

糊とつけすはるるとり星く梅のほをとひくあはす
まハ徴いぞぬと月令廣義のえより衣服と云々梅
るの温丸に何さうさるあよ日まきせが耐華せぬて徴せす
此月あつらん事と御淹り貯りて法先及と去て三光
西とすく二つふさうすの乃よ位とて一人入梅あつらん
我まもかき収まふとてすゑとつけ並りて又筆を
たぐはとさう熱湯とてぬひき晒し乾きぬ貯用耐
米津よむとて甲由也白く餅かゝ恒筆ハ恒湯はくぬ
ひよその湯もひく一並りて居るを用よんてさう
け月も今とあそを思ふ太皇太后と云々胡荽葡萄等也
純陽の月もとハ精氣と保老とて教池と云々月令廣義
とさう又は月暴怒とて心と傷事かれと云々秋

瘧とらぬ又冷水少く西と夜のみ早くも平取む

五月六日味元と服せよ五月より始つてのびと陽林集安小書

層氣元より始つて又又六日塔元と服せよ一冬六日味元と服

すふよりしつと六日味元時元塔元より同く物あり

味元と味元は子肉桂とかたらるる又薛立有魯葉小

加減は味元は味元は肉桂の味子とかふるとのふは後熱湯

とむれと味元は味元は肉桂の味子とかふるとのふは後熱湯

あり書生をたすく振するにふるくともあり

日月の六候中一候蟬鳴中二候用出中三王允生中立夏

の三候なり中四夏至中五麻衣中六立秋中

七小満の六候なり

立夏中五十一刻十分辰巳十二刻中十分小満中十八刻

二十分辰巳十二刻中十分辰巳十二刻中十分小満中十八刻

五月
端午 珊瑚鈎詩話
卷第二

四日 沐浴 粽とお香ひで解粽と制するもすもちあつと

用ひず粽米とてこしあつと細末とて沸湯と

ておぬぬり又沸湯とていも又らるる米ともち米等分

にてあつと和沸湯とて煮しす丸ちり餅を六

米と煮しす丸ちり餅を六白にくつさ末とてはし粽と

煮しす丸ちり餅を六白にくつさ末とてはし粽と

唐の代は端午の粽をふたつ角粽は粽角黍百素

粽九子粽角黍と角れはよくはし又粽のつくはし

糰子角れよくはし又粽のつくはし

糰事物紀原
曰糰一名角黍
黍風土記曰
以菰葉裹粘
米以栗棗灰
汁煮之令熟

節日啖取後
 陽尚包裹之
 象一曰因屈
 原也齊諧記
 曰原以五月
 五日投汨羅
 楚人哀之每
 至此日以筒
 貯米祭今市
 俗置米於新
 竹筒中蒸食
 之謂之糉筒
 其遺事亦曰筒
 糉齊諧又記曰
 今世人五月五
 日作糉汨羅之
 遺風也異苑曰
 糉屈原姊所作
 珊瑚鈎詩註曰
 角黍之事肇於

風俗昔曰屈原
 懷沙忠死後人
 每年以五色絲
 絡相救而吊之
 此其始也
 翰墨全
 書註以菰葉
 裹稻米為糉
 以象陰陽相
 包裹未分散
 也

艾葉葉 太平御
 覽三十一玉燭
 寶典曰五月五
 日採艾懸於戶
 上以禳毒氣
 本草陶弘景曰
 五月五日取艾

くけ式も是れ糸と縄もなふてお祭のともくつかくも何の
 糸も山にすゝ六粒と云ふ乃糸と云ふは八行幣物也人の
 とくもちりねと云ふはさうしかり又推遷集十八行幣物也ちりね
 式たんのあしをさして丸つらぬらありしをさしははとわ
 らふそつてじりうをさし角糉と云ふ角黍と云ふは
 今日或ハ明日糉と親戚も送つ
 ○國俗今日艾草蒲と屋れのきに括む

梅すふ葉時元五月五日艾とむすひて人の形のこ
 くをくたふふこれ毒草と云ふとんえり因俗
 艾草蒲とのきに括むしるまことかへ弘に式
 五月三日平旦ふるる蒲をたふくも後の葉よとく
 とあれたる時よりちるるゆくみくうり又括む括
 五月四日及寮草四月裏殿舎草蒲とゆり梅中

細きと雄の芥も 玉糸集

々やとてあや知しるしうぬれそちねし

五日

ちりぬら葉せのやとく
 五月端午と云ふ事と云ふは 五穀終まじく 沘九終上大夫晋席は
 又宋書表といく月惟仲秋日在端午云々時元五月五日端午は
 月よあはれりてててててててててててててててててててててて
 國俗今日糉と云ふは 菰葉酒と云ふは 今日より
 麻の衫衣と云ふは 八月晦日よ云ふ

糉と云ふぬら葉時元五月五日
 とつとつ 汨羅に投して死す楚人よとてあはま
 あは日にも毎々竹筒の中ふ米と貯おに投し
 ておれと云ふ漢の武帝の時ちりねの歌國といふ
 の海漢と云ふに一人あつて三閭をたてて

葉佩之云辟惡

紙曹人本朝端

午以紙為曹及
人秋施丹青懸
門戶即是艾人
之意

太平御覽荆楚
歲時記曰採艾
以為人懸門戶
上以攘毒氣

書言故事曰歲
時雜記端午都
人畫天師以賣
又作泥塑天師

以艾為鬚以蒜
為拳置於門上
又採艾結為人
懸門戶上以辟
毒氣又以艾為

虎形至有如黑
豆大者或剪絲
為小虎粘艾葉
戴之

水菖蒲葺屋本

朝流例也無題

詩集藤原明衡

詩曰鸞殿鳩
廬無擇處楞
花菖葉自回
辰

菖蒲酒達生

錄曰五月飲

菖蒲酒為節

物亦辟瘟
今按中國謂菖
蒲者石菖蒲也
日本以水菖蒲

同小節といく我毎年一よりりり事しれりよ
海ふよ場より考れよ考ふ校終乃て欠よその食
物と考する今よりれり棟樹の系と考すその上
とつてみ練の系と考す結つてこの二物を校終のお
りより考すといふ今日終と考ふは是れ考すとい
そ月令廣義よて屈不師ガウこれと考すて屈
系と考すひきふといふより又終を考思よてこり
なまは終ち切くこれと考ふ鬼と考す終は考す
つて考す明後より考すより考すの法はつてこ
にあは考す何そ終より考すより考す風を死
よつて考す荒葉と考す稲米と考す一はけを考す終
これら法陽石包裹考すといふ考す考す考す考す

くゆりよ考す正法よ考す又菖蒲
酒とのし本末時終によ平日高蒲と考す終のこと
くよ本細末と考すゆりよ考すこれとの考す陽氣と
助生年と考すゆりよ山宿九節の考す蒲より考す
草考すゆりよ高蒲酒考す終
○又考す今日藥よ考す菖蒲よ考すその考す終
むす終より考すよ考すゆりよ考すひらよ考す
ゆりよ考すよ考す典藥寮あやめのつて考す茶
よと考すゆりよ考す群考すゆりよ考す事ゆりよ
也此考す本末根原考すよ考す又極よ
考すゆりよ風信考すよ月よ日五練乃考すよつて終
よ考す終よ鬼と考す人考すよ考す痘疫と考すよ

爲菖蒲端午用
瀆酒者非也本
草曰石菖蒲除
一切惡端午日
切菖蒲瀆酒飲
之或加雄黃
少許洞天保
生錄

【米百草】太平

御覽荆楚歲
時記曰五月
五日西人並
踏百草今人
又有鬪百草
之戲夏小正
曰此月畜藥
以蠲除毒氣也
日本書紀推古天
皇紀曰二十年夏
五月五日藥獵

浴又菖蒲湯太平
御覽太載禮曰五
月五日畜蘭爲沐
浴今按國俗浴入
菖蒲煎湯亦此
意

【黃梅雨】本草綱
目時珍曰梅雨
或作微雨言其
沾衣及物皆生
黑黴也芒種後
逢壬爲入梅小
暑後逢壬爲出
梅又以三月爲
迎梅雨五月爲
送梅雨此皆濕
熱之氣鬱遏熏
釀爲霖雨入受

一名之令傳一名之令傳一名之令傳一名之令傳
一り入提安係小人坊午の難係とて今親
経心子習い纏とて今親

○又世伝は今日言菖湯と用く沐浴するも何れ
梅より大載禮は五月の菖蒲葉を沐浴してある楚
許は沐浴菖湯の沐浴すもよも風なるを
菖湯と用く沐浴するも何れも風なるを

○又今日婦人女子たりてこま言菖とて赤挿と腰
におこすはすれ病と凍くと治るひありを

兼阿難記は端午の日菖蒲艾を割て小人飛ぶ
物みま胡葱の取のこくこれと帯て邪氣
と辟く記せりりる世伝もや日新云う帳子い

よく明物知是天中の龍刻菖蒲葉の辟邪又
菖蒲葉を符に玉燕叙以艾虎符

○今日京都紫衣の袴は競るあり神友七日の袴は
深倉とて今ありて教平足朝日まきの足とてなり
て二の事とて定めありてお家木とてえ一とて文平赤二つ
とてより勝有の本とては傷のあの方ひれば木は色
より水とて病ありてまとはれりと戻りす足指の伝人
群集とて今取なると傷のあよりひせて大なる木の樹ふ
のあよりてやまはふとてけりる地をみ核なると言はるを
まらるとあ侍のあよりるあらちるけり杖とてしてひは
るるしてせも馬とてんかうりる群集の中へけとあはる
らへんもいもとり行杖とてはるるは縁よりしてらるる

ぐし草として天賦一紙もなげはよめよひてし
をららびのうす何れ皇の出たふ軍勢のふゆとあ
けしとあふ却部のきき今日高富のあがるをうと
けしとあふといふとふらぬくうゆはは半じうい
低し人形とふて何房に後と胃の形よりうと或
にくるると他と或本と鞍も力のうとくううと
みえゆりしうと年八風落美巧とあて本とあて
の形とふらとふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと
たてゆりきとあてふとふとふとふとふとふと
長年あつちとふとふとふとふとふとふとふと
術と用るとあて或も流と加えくととあてふと

朔月うりあひましく見事との事奉る

抄子にあらうともこれに似たり本より東阿新記よ
いくつ年よ衆の人天所と盡て賣と上とて天所と
て文とあて候し蒜とて巻う門外とて又
採法して人の形に他とて戸のうとてこれの事奉ると
くくしう 抄子より及家より後序の法後と
抄子より及家より後序の法後と

○今日草ありせん百本の刑禁定案時記よ月百
茲よ編百草とて百本と編しむらの裁ありとてせり
これいふうりあひましく 日本紀よ薬糖とらる
七二ん本とて抄子 章草とて
帳子に百系聞香若又章草とて詩ふ今朝聞草の
宜見とて何り政公聞草のゆよ共聞今朝聞草の
事奉るゆり百本の汗と候とて發と膏と膏薬

死すまで百病疾疔を駆してききの膏茶小を四十倍する
 又今朝日未嘗時百毒と標く計とつり出し石灰を和ぎく
 候は滋乾す一切の全疾を治むと月令廣義に云え
百毒と云ふ牛膝澤漆を茶茶をこしてしるすと常時飲むと病を治す
たり たり牛膝と胎と云ふ 澤漆を茶茶をこしてしるすと常時飲むと病を治す
 ○広葉茶と七厘納の日あり又芙蓉と九厘納む 五月五日梅を
五月五日梅を
 治す凡艾を上に已し端午に九厘納むとすし此茶の苗みどり
 及時さうと織金霽英をいれり市小うる艾を燒茶と
 する又採時何れに用ふるはれは伊吹と云ふ性より又紫
 金納は完全丹千金種子などと合ふるも今日す
 ○又今日競渡する事ありこれ原とすしそ遠きほどか
 り一取時凡まゐりせり 月令通考云ふ越地云ふ所て競渡の
 類玉句踐の故蹟と云ふなり
 石屏の端午のゆゑ

榴花角黍薦時新何處亦不酒樽堪笑江洲老
 詩の客也也 隨蒿艾上朱門 又 家人
 流榴花上流く海目切菖蒲泛濁醪今日福確福確を用む
 為君痛飲飲 難離難離

十二日今日行と後裁下音書に六月十日と行研日久又行
 迷目もよこの日行と云ふは治と云ふなり

昨日沐浴

け月潤るゝるんど物多くとあつく又微もはあり梅雨の
 中肥土赤茶容石梅栴栴はよの枝と云ふひてえ下し
 月令廣義に云ふなりは時葉土まつく 菖蒲水菖蒲水 梳とさ
 せん甚よく治又芙蓉入切す此茶ハ飲茶と云ふ
 おしてりてハ茶本潤くし物多くとあつく

とつらん履とはくしむて唐書籍至物合物号と晒
彩ふ裁らるる葉菜蔬はあかひ塔屏と草ゆと功用唐
し又物ぬ水と大瓶と肝玉糸と賣すれはれりて夫を
と桑得よんえたり但日とてま吹くは又物ぬあま
瘰癧と洗ハそのあをれし將をと化ふこれと用きて
漿しやうく衣以けふまこれと用れ灰汁のよくと
不伝る合物中多まよんえたり

栞ぬか入乃尻終くうて一決し然し押難ふとく風入
立夏の後庚よあ旨と入栞く芒種の後未よある日か
出栞く神棍にいしく芒種の後丙よ何ち日と入栞じ
小暑の後未よある日と出栞く又碑金録よいしく芒
種の後土よある日と入栞く一玄公のほ庚よ何ち日

と出栞く入季時冷が後ま芒種乃後壬よある日と
入栞く小暑の後未よある日と出栞く三元政よいしく
芒種の後丙の日はあると入栞くすく衣迄まあしと母
面溼衣以ぬすり終りく又えたり凡栞ぬか入乃
かき知得ともよ何りく乃尻ゆかすれまの尻合じ
換軒膏若微雨沈しく法湯之は其固有之也此の
天地の流り安んじや病に在る風ぬく時候必有り速
ふり栞ぬか初栞ぬか出入し初栞ぬか夏書思
ふり栞ぬか子日未法書不ぬ書然し此言す只以
芒種の後未の初栞ぬか之日入栞ぬか之日
か栞ぬか未其不差矣十月凍ぬか之日也

世法一守及生のふくしり何り重畳内法よいしくむ日

乃中より上る日あり日あり日見淨とありん不礼
然不念む年海月日なり

栴那り小蓮葉のあた摩耶夫人の中法の上中なる也
よ善きものとありて本とのぞくことすやりの小中
まけそ七午二候の内まとの骨之候もさへ乞ふ所を
して高況とていふなり

夏正の日并とて流水とみれぬ瘧疫とやまへて淨の礼候
志よりんことあり又夏正の後内下ふりて日未始の文以
すれば大にあしとて千金ににたりせり

い月の初ま栴とて皮とまぐり枝と去籠は入火上りたり
まぐり後収用く鳥栴は皮ありて時とまぐり
又物つち栴ありてともおぬなり

此月米苞とぬ米ぬへて最たる苞ゆりのかかす最生ぬ又
まの石蛤殻乃灰とまぐり米苞にぬりまぐり不露

い月天樞中脘等も灸し暑月のことありていれ保赤子下
格氣と保赤子と格致餘論といふに古人於法を獨宿る淡
味競く業を格も護也保赤子令水二腕二腕と土と服す

月今ふてく是月也日とて臨陽象死生なる君子各戒交掩
母深山智也母或進意深味母致和節者欲定之氣又日は
月也あはれ右方明可いそ眼全ふい山陵あはれ生老相

保生心腹といふくも月枯井及深窞乃中よりまぐり
先統の毛といふくその中ふとていふくその毛旋舞するもの
まこれりちこれ毒ありなり

此月煎とくくハカりて同と換ずと令運煎略ふんことあり

煮餅祀魚糰及未熟をざる果とてぬりてこれ乾と乾
 と云ふれどく食うるは又枇杷と炙肉糰麩をたたくて食うる
此月令庚辰書云 午令方に椽席の肉と食うるは又令
 医おあつて六月酒中の冷水と飲するは魚糰の乾決
 肉より色とのめば瘕となる
 い月豊人田に苗と挿し又圃に大葱のたぬきとて
 翌日よふもとあつて
 六月の六候中一候蝦生也二候始鳴也三候玄鳥至也四候芒種
 の二候より四月藤角解也五候始鳴也六候夏至
 右五玉乃三候なり
 芒種至六十刻二十分夜三十九刻四十分夜五十分夜七十一刻
 三十分夜八十分三十分 日令庚辰

六月 氷餅 國俗 乾浸
雪水餅 六月朔

日食之 乃用夏
朝古者 諸國

冰之遺意 我
冰室貢冰 凡

用冰不止 於
六月朔 夏日

摠用之 本草
即顛曰藏冰

以時則雷出
不震 棄冰 不

用則雷不發
而震 又食譜

云凡夏用冰
止可 蒸飲 飲

食令氣涼 爾
見東鑑 武人

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の月名と季夏と月名と節と
 律と林鐘と云○六月の月名と季夏と月名と節と小暑と云

初日 賜冰 帝と云つて今日冰と食ふ所あり

二十二年六月朔日大中考皇子厨給也
 乃山の上より即中と云なり
 やりぬり江何し人として
 何の山乃何なりふゆり人として
 中皇子その氷と云はるけりて細し
 て中と云くまとして一丈餘り
 ととあつて氷と云はるけりて
 中皇子その氷と云はるけりて
 帝と云くまとして一丈餘り

當炎暑節取
富士山雪備
珍物建長三
年六月思茂
民勞議止之
此亦出被冰
之意而極驕
泰止之誠可
也

嘉祥世談問答云

六月十六日嘉祥
者仁明天皇嘉祥
二年六月十六日
豐後國戲白龜以
為吉兆賀之自此
以來有嘉祥之儀
今按嘉祥朝家盛
糲米干錫盆賜臣
下或士大夫飲燕

婦女亦以嘉祥通
寶錢十六
文末菓餅 六日
故以嘉祥
名嘉祥取
於錢文也檢 十六日
續日本後
紀載豐後國獻
白龜而無以此
為嘉辰說竊謂
古者六月多吉
禮朝家行月次
神今食祭而有
忌火御飯解齋
御粥又祇園御
靈會 園會
祇園臨時祭五
日今有之十六
日是似諸祭後
宴

此のころより日本中氷と云ふ初より其後より季たると
元を細く圓くして氷室と云ふれりしなりをいそぎて丹
波の阿久山氷室に作りて入富士山伯耆乃大山を
より氷と破せりなり民間を舊稱製せり糲とたく
之を今日令て氷とくらふ準す

りりしより氷と云ふし年あり周禮不凌人穢と云ハ
氷室と云ふる友好く去るの極きよ海山函谷より
氷室と云うてと云ふ夏に於て異事と云ふけんぬ
み氷と云ふて群はよりち婦も毛清と云ふ日敷氷
沖の三々日細く凌法と云ふ左傳冬日在氷陸而氷
西陸相覲而出と云ふもこれ氷と云ふ也と云ふ
よりより晉乃石季龍之使の日氷井巷氷と云て大

はよりより一の都中元はくより

神麴を製する日あり製法は市系あり詳ふれらる
記より

十六日け日聖名よりあり聖林曰季相陰といふかきりハ
嘉祥と云はく仁明の在るより承和のはひより神代のみ
よりふ瓜の形をまねてよりあまのつらふり
てはくひを形より免治ひを全う六月十日ありより
よりよりよりよりよりよりよりよりよりより
年号としめたる免て嘉祥と云ふのせりよりより
後よりよりよりよりよりよりよりよりよりより
り元よりよりよりよりよりよりよりよりよりより
り六月酒原の向きよりよりよりよりよりよりより

名越被古者六

月晦日十二月

晦日有天被見

神祇令中世以

降稱六月被曰

名越被言解除

不祥越夏將至

千秋也夏和割

那豆名和割那

名乃那豆之略也至

于今為脫管輪等義

皆被之遺意也十二

月大被者無省遺餘

中華有春被秋被

朝有春被無秋被六

月被近於秋被

揚升菴文集第七

十五曰被

水上被除

也然有春被秋被

揚升菴文集

第七十五曰

被水上被除

論語浴乎沂

注上巳被除

王右軍蘭亭

暮春脩禊此

春被也馬融

西第頌云西

北次亥玄石

兼輪蝦蟇吐

瀉庚辛之域

劉頊魯都賦

曰素秋二十七

天漢指隅人

胥被禊國子

水塘此用七

月十四日指

秋禊也

負多りの美色は浅すた又とがして金おと買てうちた

とのとりてかえり嘉元を定の寧宗の年号也て十

年有りて年毎小結あり銀元元年より十六年までの志は

り瓜土上浅河は思て今日一人をのともてかしてあはれむ

りちのち被たうかうされしわうり一ありてかあはれし

今柄すふ宮者物徳の徳もあふくそのあふあふりるは

久し遠りあふりるれは世に式は長流あり年根原年中

りるはしもえんぬまろく國史のしきろくもはぬり

事よりそ定てゆれは山子の被のともちあせりるの事

も被不期の所定もこりて人々を約め

沐浴は日れ月をすりてりう世後國言よるはえ

秋との別りるは被りる功徳のゆかり天武天皇の御

何うもろもれう大被りる六集被つても百發一回にせ

とるはりるの家も輪はしりる

これ月のあつきの被りるをちをめいりちのすり

りるはりるをちをすり法性寺乃國白の所見も

りるはりるこれつねに被りてあつきのこを被りて

りるはりるをちを被りて海すりて

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

りるはりるは六月也日大被の被りてあつきのこを被り

と云ふ河をさす五千半たてあきのふれはては
りう夕又あはるりあう後折り望花門のみるうこ
すみくても月以りてえんやまうこるむまは
月とて下小河系りゆりせく月のあふれとみく
そまらと二月あうらうこまて照月いふて
色あきのほよしくんぬ月く人の月も人皆疑之古
人六月に必出門系法被入納原及源行むせ及為秋
と具恒例也不限西日色行皆月被也元比去人元
御念ふ念人可参皆月被也催之件被二月十三
日也肥後は元より八強はあひは限うらう

九之三伏しりあひ俗人多くいひあうはせり九夏を冬交三
月九十日あはれはくしり伏し金氣伏乾の日はう四時の

うつりらるるお生とひてひまを本よまて冬の水よ
ある水生木あう交は火はくあまの木よらる本生火か
ひるま水くく秋の金あうらる金生あうたは秋を金
けく交の火よらる大元金く金火とおそる原小庚
日くいりてあはれ伏す庚を金なり三伏とい交之乃
後第一之庚と初伏と第二之庚と中伏とい秋のな
す之庚と末伏といあは三伏とい元早日極く換す瞬
乃大寒に對するあり唐之秋よ
梅あきく後書と目よ瞬をく新舊あひるあ表紙と下
けく乾す字繩よあは物とあ表紙換す天氣好日は
こも一日に二度なるく乾すり物一午未の時收む曉よあ
暴あの変りくあく收むく一屋下あはく換ふと海

一東より明朝家へ納じ凡書を晒すや一夏より夏
をくらの幕毎の物とあり又多かれ家奴厥ひ供と
んを晒す書と有りなる所を扱壞おへ候所
断らるる糸と福ひ進と取取のこく棟中へ納者
と糸とゆせしめて蓋と閉し屋中小へ晒えを
かこのとく烈日小へ晒したるを扱とせしむれば
毎年くくせしむる書の手壞かし古も書と
介みさくせりたるもえさるる糸と糸と書と
下よりゆのよきりり居家名用といく古書と流る
み多く書と用く書とさく今の七百里書といふる
位者も考へ山摺のよしく書は又考物なり其の糸を扱書の名をいふる
はふ今知格いさるの糸と去の糸は御はりやまうて扱書といふるなり 又麝香
と書厨の中へ入るる書は瓜く一法小樟腦と用るとす

圖書を晒すは一時許日は晒し一色も淨き薄皮淨紙

志紙なの上へ蓋へ繩をけ竿にかたをけく久く
晒すは圖書のこをすす表とさすへく糸と
みひとる紙とをくひろくつきたるをかくし批と

さ一方と能らずしこれ又此をれ書をおへ書生ハ勝みハ
六月の月ありぬ

甲冑兵かきと布とめん布とかわひてす時とる烈日小晒す
へくくく晒すす厚下へ収め熱氣さめて後ね立

日中へ納し

衣袋とも晒すへ光絹をへく干へく又英海紅也
かとの色はやむ物と日小晒しこれと晒せば糸とる
相取表志小正月夜のくく色つきたるをへく凡の

みひし洗ししを痕を又枇杷のさねとすりて細末し
洗ハ七規自去ししを垢家必用小を梅白ふびたる衣
服とハ梅系と煮しして洗しとあり又垢家必海まはし
凡衣服の墨を汚しとハ香仁の皮と細末し碾茶と等
分小舎せられ方よひ初しけ温湯少と煮しとよく
よくすり付し後洗のくし又新天香墨となく絹のたこ
たる取込なくすれ自去又白梅とすり付し洗しと
あがれ方衣服とハ滑石天を粉各等分と末しと付
粉末とすり付し又付しとみ度とすりて自去又汚る衣
又密と用し洗しとすり漆まけがき方衣服と洗し香仁
川椒等分小舎を研爛しして汚る衣と擦り浄く洗ハ

自去又血汚たる衣服とハ冷あつとけりハ産又白衣
と洗しと煮葡萄の煮汁と又と高唐と細末しと水小
つれて洗ハ白くありなりハ垢家必夜

刻し垂る茶種と紙を包みとすりしとひりき日小つて
晒しとさぬら茶を命と日小干しと千金のふじと茶と
こいし日よ干しとふれ茶力とすりたるあり高唐用ひ
する葉ハ烈日よ干し新瓦器よ入土とすりしと付し
丹地おしと煮しと又付しと茶と煮しと新しとすりし
丸散の茶もははしとすりしと丸散の茶と毒は貯り保
護すれと茶とたより茶とすりしと茶を丸と煮しと病を
丸の物おれを煮しとてぬたくり茶味のぬきをすりしと
しとせたとすりしとすりしとすりしとすりしとすりし

ゆきや菜と合さうとゆらぬて口とよく封一五丁一廿
下れ之くくろそしや菜とせぬ是菜とたとの良法
あり地菜白芷当ぬ菘活川草神麴菜菔耳草など
を時と晒されぬ中既くふ物なりと解るをむくさるに
りかかれ氣味よくなりぬ

是物も乾くよのを煮く晒す一丁五丁板を製し一丁
物の乾日は晒すふかれ菜と白米晒す只下下の種よ
知く五丁一丁と編と編津うぬく言ふ下下子位し
あり中一よとふ志のく日よる一丁ゆられ煮むし
乃種を浮方う煮るとせん中煮た六丁倍子法聚まて煮
ゆかれ煮るとせん九丁とゆらう東坡菜の煮湯といて
乾粉と調りぬといひ一乾くと結くこれとぬむく

子と作てしゆす山六六川椒と煮まて煮一丁の汁よく
抄物と云とすうゆいと深色又むすくと滑確麴書よ
又くうり又進の汁菜拍の汁かく小ぼしてりまてし
ゆす又又秋のるゆ煮く一掃法と入五六担の九丁と流
ゆのを挽湯ゆくとまう

寸月とれり葉一して取腹う小菜の葉と飯の上と煮六六宿
從てし焼すくと豊菜掃あよてくうり又生魚熱食は
とと并中よりうすけくとき八抄せぬ月令度家よ
あやうり又五月生肉とゆらぬとうどののこくとぬく
肉とをの中よりく油の中又入五六丁一して換えぬ法を
辨るゆと合くうくと煮ぬゆとぬくと又膳
水と貯まらふ魚肉と煮く一五六抄す

五月の茶一箱茶と茶をうとけ味のよく多しと此は
くたる酒にみえりころうよ今と能きれ酒をけ
井の中よしとてこの茶あおふたにひるふとふはふけ
まへてくくつてとぬきの酒にけつあんとくまへて
此月山林とときふさき茶と多しと成つ下山林をに茶
多く買貯まへて茶ぬのぬあて割て晒てより
又炭と買貯まへて

茶此と買貯まへて

○此此とてうらゆか法 此と二つさきふことを去此乃
片まれのの内八九分とと塩と入一取茶ととけおきふ
おしう下ようちうと一日とよく日おるにくとくするふ
らぬ又未おう津らるふと一ふらりつて後つくつて

○此と糟淹まする法 世傳ふ茶はつけとま此と二つよこ
とと茶ととえうこうちいとこをちうくひて茶此のは此を
ふたう此の片まれの内は塩はかめんと入此何つくまぬ
目もと入茶入をいひとて此をけ二茶おるに茶あて
塩けまてあひひて塩けのかよく時よく日よかまて此
糟とまきゆりはせしう瓶入て此のつとあはぬや
うらててうのうよ塩と茶のありなるよくにまらう糟
まて塩あてせてう一茶糟をいふ此を合ととせてよ
糟多く此つくはだかよく此多う糟つくはだかへ倍の
越よふ此と茶と一此おすをつらるのかまてとて瓶の口
う風ひぬふふ茶ととてとてととととととととととととと
樽と口ひらふぬ瓶乃はせとてなつけたるは世傳の

ちんちんとしてすきい万とよくきく下し血をぬく
つけてつせしるほし又紅豆茄子かくと二夜塩につけ
ゆきとまけて汁とせし糖をくれば細きなり

乾瓢

乾瓢乃製法 好天氣とらぬひゆふと上皮をす
て換り切し切らんと者すすこぶまりしてあふんを後
え出して繩よりかけてるなりし紙を天乳ぬくたの
下く水を入天氣好時に出し繩よりきくぬけて能ひる
壺の中に入らぬまをくしちのこくろく後沸湯とら
けく又おせぬを白かりくし味あてし
○塩干瓢乃製法 瓢と大斤を切後ゆけてかきとら
ちんちんとして七日のてら何れかきりて後つるよ入

細豆の味老のえんじりかきする中もも製法

○乾茄子の法 ころろ茄子とえはと去二つさうて

干豆用ら何取出一あふんをくひくして蒸美り

加し おれお味老の茄子とぬきよがの灰よ
まきくまハクくし塩ふとあり

○紅豆塩淹の法 米粒を斗み塩を弁り合てワ

くし紅豆を蒸しり漬とけハクく控せす茄子も

みかくのこくま

月餅

○将月餅乃製法 大麥 大豆 塩 水 二石二斗四升
水を煮て二石二斗

先大麥とあつさく粒白くし尾馬をくして石印を

門より大豆味老の大豆のこく煮て大麥の粉とら

やせ扁黒よひろち土をよ入麴と百斗麴産の池を

時右二石二斗の有り塩一石といれ木を少く煮て
を極湯と云ふにいりて煮るもとひくしてあつ
たり厚く取り耐瓶に入れ入るもあつてはし他り入てよ
くよく拌初より家の肉も煮たりありて本十日日およ
まてその後肉も入れ入る水了てとち入るなり他入
て四十分なりとて煮と入る右の分をたて白米を
斗の中水半入粥も煮て塩を斗の中よく拌せ煮し冷ら
れたのお粥は瓶に入れ入るなりぬす白米とて酒と三斗
とくふくろもとり梅のふくらも穴と何ちも梅も今く
穴入りの中に入れてとち入る初より入る目を
九七十分なりとて何分つとりなり洗し煮たり煮く
後美味換したる小昆布と切て合せ八味よく作る也

○ひいへの煮法 大豆半 大麦半 塩半 水半 小麦半
るをく白くつとありにひいて豆は炒てとり皮を去る麦は
足るをとりとてむして土釜に入麴もかたる耐水と塩と一
よ入る煮くこきり瓶に入れ入るなり後日他日は
何れ味はる耐用し瓶の口を紙で封するぬきさうにす
つと煮くこれ味をぬく煮すふふ小煮も入る耐合するに
分ちとてこきり瓶の口を紙で封する

○漢名網豆の製法 豆半 小麦半 塩半 水半 小麦半
とく煮熱し小麦の粉と煮る土釜に入麴もかたりさす水
半も塩半も入る他煮て梅も今もとちの麴とてはし塩汁の
肉も入る煮く生姜山椒皮は皮はもとこちもは製て何れ
色も麴と一耐は塩汁の肉も入るなりとて作りとて作る

塩汁うくとそまを並ね出す時のくくく七八十日にして味よく
匂うて時宗種の家と末してまひませが日なりして毒ふつめ
玉一

○又細豆の法 大豆を大麦を塩辛大豆とて豆のよく
煮く麦とすくくして粉すく大豆のあつさ肉を拌ひろと
けて一段屋次の日え出さ土室に入らうし小粒をそ後塩を入
水ひびるをくも入して七るなく塩辛皮えせうまそのまその系
白胡椒陳皮分と入三日なくおくとけく並ね出さ一日ま
てふおくとおとち付おとちあつとつをりよまて

○令守致の製法 和州守の種 大豆一本ソくて片皮を去
蘇細とこありひかす大麦一本能くあよく洗水二言後
右麦と蘇材の大豆と一つして蒸し熱した付細末の豆

粉と拌せ土室に入神く麵とあひそ麵塵の付三日あよ
お 和州守の種 白丸 和州守の種 塩辛大豆子丸と豆の塩よ
合せ揃ひ入らうとけ一段屋明りよま出らあつとえ麵とひ
た丸茄子もあつとけまをそく揃ひ入らうとけおりと
うくけを毎日二二なるにせ十日許して後茴香山椒皮山椒
種葉茶葉種と能く切く拌みあのとくまをそくまをそ
くけを毎日うまをそ七十日とて用し二三日あひの味つく
ぬう後よかる味かかをそろのの好まよる

○美年醋の製法 醋と酒と等うま合せ量よ並ねく
只とあひひ月土用乃中壺あつとあひ並ね交りよ物一七十
日とてこれと用めあつとえたつと酒と水と等うつと入
毎な此をれはつとまをそくあつと等うま合せ量よ並ねく

刻でかきしるし金六葉乳みするの言着痛碓もさふ
日初より時あるよ控境したる牆壁と修屋をく又ゆたの宅
早する時井と浸(思泥)と上まきく白砂と入く一歩みぬ水
の元味よりしゆくなら

元月切漆も刀鍔をく異月まなぬかられ端生ぬむきの時
もよりくぬくく一又五月も流る御もくとみくく一
五月改書と去法 茶末 晏木整仁(ニニキケ) 椎葉(引研)以上細味し
て客よりて特丸く一名大よこれと禁く居家名用もええ
より又龍龜の骨と焼ハ蚊皆死うからきの骨もよして川魚
の骨ハ禁くハ防蚊と去又浮萍と着流とと焼てもよりと
月今度義もええより又今月今よ五月は浮萍と取く
陰干より一煎葉もまきく禁くハ蚊と辟くまきり又五月は日

甲申の浮萍と云眺乾ハはは美の血と云くこれな漢一又晒
又漢す山けすりり敷及く後葉く香く命禁く大よ
蚊蚋と去し居家名用もええより又麻の糸とけりやうりけハ
く蚊とさくらの物おれ我志もええより和倍ハ極の本とた
くこれよよく蚊とさくらの物おれ我志もええより和倍ハ極の本と
よくさくらの物おれ我志もええより和倍ハ極の本と

交りぬやとに者す物りぬるく火のつりまきくさ力下
とえのせん 詩子大木蚊のゆふ

先回揮扇唐鞋去終被意物即改淨

○又蠅多き下をこくしてあこと敷余もひくく之よかきまバ
蠅老るく乞も物敷お感まらんえより又蚕多きよよ高唐
乃末と席乃下よひ移るよ土をくさ方糸と何つ免く麻よま

下と月令廣義よんえり

五月乃る世人暑氣よあてりとも夏内或途中少く候は病て死
す半はこれと中暁も暁死も俗よこれと暑氣よ
あてり候は病人と水よひさす候はひやと而時久
すものや温湯とぬぐいさす候は腹のるあてり
しと年中を病に人あてり候は此上の聖と胸腹の
るよあてり候はこれに尿せり又薑と大蒜とつと相じ
契湯とて送下せ八節活その後茶とあてり候は
えの乃る天氣熱く候は汗成將水辟り方候は生脈散と
服す候は病候は候は法暑益氣湯參益
允湯とて服す候は五月は茶と服す候は生脈散と代じ
し方書よんえり

茅苜 蜜飯 人參 白朮 白朮 當歸 五倍 蛤蜊 五倍 陳皮 五倍 薑肉 山藥とて代之
白扁豆 各一 五倍子 五倍 麥門冬 一 耳茶 五倍 右十味亦加
茯苓 一 神麴 一 粟米

凡暑熱の時格字と保老とて謹て致せり候は
世保元といへく六月暑入痛勝似灸膏盲又孫太人といへく
交時陰氣内伏し暑毒介と蒸す候はまきせ候は凡あてり
冷物と今ふ候は暴泄の患と牛乳温服候は合飲とて
大い候は候は

園菜若草花との日よいむみありと流よ公炎克既よ収て夕
あよ流し候は日中の暑く候は時水とてけ候は冷熱お返して
花弁たよ枯り候は月令廣義よんえり又老圃の云候
よ流九よめり候は瓜皮候は次子於流とて候は

大和ろく流取ふくやく流し

月令廣義よりく宵は花橘の水とうくは土とくは牙の灰
羊のお糞と土紙のい実多し

秋の北颯風吹ふくをけしめを飯とく板瓦と固く

草をの種と使く又橋柱木と使く

け月並と食八月と昏す羊肉とくハ神事と傷る登見

厚唇茶菓と食すと忘入生養と食ハ水瘕とるたの

あま塩方れは飯角魚とらん食とくは用し冷水生菓

沈臓神食とる食するりふれ凡葉炒博茶の厚味は

宜くかき用し月令廣義

凡交のる紺凡とる食するりふれ凡のあま入て沈よ茶毒

あま月令廣義よりええり又いん及蒂乃凡人と較て又

他併と名れく食く次おれお感志よ凡ハ白梅とけく

輝しはれ凡と食く後白梅と食く又麩香とく

凡と消化す又石前魚と名今今れは凡とけく水

あまと下すあま

六月乃六候才一温風之中二糖滓居辟才三尊乃学智

大小暑乃三候なり才四腐草乃為管中五土潤溽暑才

六土潤時乃才大暑乃三候なり

小暑宜上中刻二十分取中九刻四十分大暑宜上十

八刻二十分取中一刻四十分月令廣義

土用 かろくしそと土取し終す
又土王としけり

春ハ木取く夏ハ火取く秋ハ金取く冬ハ水取す及び

乃ち土に四時よむおこすといふ事なり
 位かくちなる氣れくして四時の物より辰未戌丑の月の
 未と未寄取すりり者十八日一年よりして七十二日あり
 世七十二日とのうく時を本太令木も又も七十二日つ
 けし多一年とひんたうりよきを本とひんたうりよきを
 土用と書かす秋の土用を土衰老して感ふ一その
 土用の水と本とのるよけれい書かすす夏の土用と大と
 令とあるよあり夫土を大よ生せしる取ふ夏の土用といふ
 西しく土王の付す土より令と生ぬ取ふ秋の令と土を
 七千あり未の月を大令のるよけり又一泉の中なるれ
 中央の土一令と大よ指くみひの序とちぬのこ取よ月
 令よ七季夏の次よ中央の土とのさとり

元と七もろしはの後のれ
 一のれりるもろしは

俗に六月土用よ入日蒜及赤少豆と令ふ一痘疫と辟と
 今の人のうくす事ありれハ保氏西漢の書木の本よ
 こくぬちのさうやくすしりり宗祇後ふさうやく
 き蒜ありとけれハとりとりありりりしとれい
 その不況と云れぬ事あり痛飲といく若人四月
 其食五辛以辟厲氣温避葱韭蒜薑也又肘後
 方に元日及人日麻子少豆各七粒と云を疾疫とけす
 何りこれな来初のまらひ事と云えりりり事とは
 あやうりて六月よりや從竹論の令ふぬり
 山本と六月土用の中よ孫くす
 六月土用の内。藟とてけと竹符とては下血の

久しうに用くれば、
人の病多し、
麻と稱す、
可いやくと未だ少く、
考て

日本家時元卷之四畢

不契后州飽田郡隈本府下

高田原産 中村 萬喜直道

